

「笹川杯作文コンクール 2011 感知日本一」

入賞作品集



 **公益財団法人日本科学協会**
教育・研究図書有効活用プロジェクト



このプロジェクトは競艇の交付金による日本財団の助成金を受けて実施しております。

目 次

1. 「笹川杯作文コンクール 2011～中国語で応募～」	3
(1) 一等賞	
ネットワーク 周毅	3
四川大学 王丹青	4
汕頭市龍湖区人民法院 王晓霞	5
海南師範大学 李芯儀	7
四川師範大学 王珂旻	9
(2) 二等賞	
広東省 楊立志	11
山西省 趙春	12
四川省 張学梁	13
天津市 劉筱璇	15
北京市 丁国強	16
安徽省 許志勇	18
上海市 李笠黎	19
北京市 孫默	20
広東省 張梓燦	21
四川省 周夢娜	23
北京市 盧学麗	24
山東省 呂盼	26
2. 「笹川杯作文コンクール 2011」～日本語で応募～」	28
(1) 優勝	
東北大学 劉倩	28
中南林業科技大学 羅紫薇	29
(2) 二等賞	
三江学院 池芸芸	30
北京市第四中学 遊夏	32
(3) 三等賞	
大連工業大学 韓璐	33
揚州大学 倪雨晴	34
大連大学 畢利文	35
北京語言大学 阿勒塔·吾鲁扎巴依尔	37

(4) 優秀賞

長安大学 史永樂	38
西北師範大学 高瑞金	39
上海師範大学 史菲菲	40
湘潭大学 徐瑛	41
常熟理工学院 高科	42
对外經濟貿易大学 張燁	44
天津外国語大学 孫迎	45
蘇州大学 王莹	46
三江学院 陸徐霞	47
東北財經大学 李麗雅	48

1. 「笹川杯作文コンクール 2011」～中国語で応募～

※原文に忠実に翻訳しました。

(1) 一等賞

「フラットな視点で」

※アルファベット表記は、原文のままです。

ネットワーク 経理 周毅



よく知っている人と向き合った時、或いは人だかりの中でふと見知らぬ人に出会った時、あなたは相手をどのように見るのだろうか。仰ぎ見るのか、見下ろすのか、はたまたフラットに見るのか。時にはこうしたことも問題となる。

例えば数年前の話だが、アジアのX国から北京にやってきたばかりのYさんに中国語を指導するよう友人から紹介された。私が過敏だったわけではないことをひたすら願うが一話をしている時、彼はずっと私の名刺をもてあそんでいて、もみくちゃにされた名刺は、しまいには一塊のごみになってしまったのである。話の間、彼は先生に対する敬意を見せておらず、また初対面の友達に対する礼儀も感じさせない態度だった。おおかた彼は自分の国が中国より発展しているとか、在籍している会社が割と有名だとか、自分の職位が高い方だとでも思っていたのだろうが、何れにしても、彼の語気や態度にはある種の優越感がにじみ出ている。それは、一種の“見下ろす”角度であり、面と向かって座る人にとって実に不快なものであった。そのため、彼が毎週二回の指導をできるだけ早く開始することができないかと尋ねてきた時、私は丁寧にではあるが迷わず、申し訳ありませんが…と言った。

この件は、個人と個人との間で起きた、大勢に影響はない些細で小さな出来事に過ぎない。しかし、ある国の多くの人々が、他人や別のグループ、或いは他国の人々に対して、見下ろす、仰ぎ見る、ひいては敵視するという習慣を持っているとなると、問題であり、かなり深刻な話になってしまう。

最近の例では、3年も経たないうちに、中国で“5.12”汶川大地震、日本では“3.11”大地震が発生した。この二度に亘る極めて破壊力の大きい地震が発生した時、発生以降、中日両国政府と両国民の間には人間性が輝き感動を呼び起こす多くのドラマが見られた。だが、同時に起きた別の出来事が、筆者を含む多くの人々にとって心配の種となったのである。

私の仕事はインターネットと不可分の関係にあり、私が取得する情報の多くはネットから得られるものである。日本で“3.11”大地震が発生してから、中国国内のネットフォーラムで他人の不幸を喜び書き込みをいくつか目にした。その言葉は恥ずかしいかきりであり、私はそれらを繰り返したくない。

時間を3年前に戻すが、中国で“5.12”汶川大地震が発生した時、日本のネット上でも同じように他人の不幸を喜び言論があったのだろうか。私は、日本語が分からず日本人の書き込みを読むことができないので、むやみに結論を出すことはできない。

そうした言論の陰には、一種の根深い敵意が含まれている。その敵意については、それが生じた歴史的原因や必然か偶然かを分析する能力など私にあると思わないが、それは間違いなく中国社会の主流をなす視点ではないとだけは言いたい。そこに現れているのは人間の弱みであり、醜い一面である。

“善意で人を助ける”、“徳をもって恨みに報いる”といった古い教を説かず、ただ“相手の身になって考える”だけでも分かることである。誰の郷里で天災や人災が起きた時でも、その不幸を喜ばないで欲しい。彼らが蒙っている不幸は、自分が経験したものかもしれないし、これから自分が被らざるを

得ないものかもしれないのだから。

ネット上やマスメディア上で、別の言論的現象も目にした。事実を顧みず、分析を加えることもなく、惜しみなく相手方を持ち上げて自国と自国民を蔑む言論が見られたのである。

日本で“3.11”大地震が発生した時、どれほど日本国民の素質が優れているのか、どれほど秩序が整っているのか、どれほど政府の対応が素早く役立ったのか、など褒めそやし始める人がいたのだ。福島原子力発電所の放射性物質漏出危機が日増しに高まっている時、“ヨード塩が放射線を防げる”などといったデマが広がったため、中国のいくつかの都市では食塩を買いあさる騒動が起きた。“塩の買いあさり”騒動はごく短期間だったものの、この件に便乗して持論を展開し、多くの偏った言論を発表する人もいた。こうした言論のテーマとなっていたのは、日本人と比べて中国人は素質が低いという思想である。

しかし、それは事実ではない。或いは、事実の一部しか論じていない。例えば買いだめにしても報道によると、地震発生後、遙か東京のスーパーでは食品が競って買い占められ、陳列棚が空になったということである。東京の水道水で放射性物質が見つかり、政府が「乳幼児には水道水を飲ませないように」と広報した時、人々は政府の公表データを半信半疑であった。被災地で“僅かばかりの水も求め難い”だけでなく、何百キロも離れた大阪などの“安全地帯”でさえ、市民が狂ったように瓶詰めの水を買いあさり、買いだめしたのだ。地震発生からわずか半年後の8月下旬、新米から放射性物質セシウムが発見された時、多くの日本人は古米を買い込んで主食にし始めるのではないだろうか。

筆者は、こうしたことを羅列して、日本人の素質の高低について説明したいわけではない。ここで伝えたいのは、突発的な事件に直面して、人がすぐ見せる反応は善悪で計れるものではないということ、一つや二つの偶発的事件を、一人の人間ないし一国の国民の素質を判断する十分条件とすることはできないということである。

上記のそれぞれは、何れも論者が観察にあるべきフラットな視点を欠いていたためのものである。むやみに尊大になると、相手を見下すのに慣れてしまう。むやみに自分を卑下すると、相手を仰ぎ見ることしかできなくなってしまう。人と人、国と国との交流には、何れもフラットな視点がもっとあるべきであり、見下す、仰ぎ見る、敵視するといった視点は少なくすべきなのである。

「一つのりんごと一通の手紙」

四川大学 華西臨床医学院 4年2班 王丹青



少しだけ複雑な感情と眼差しで、私はずっと黙々と日本に関心を持っている。日常会話で日本の話題が出ることは多いものの、2008年の“5.12”汶川大地震までは、日本と私個人との間に何か直接的な繋がりができるなどと思ったことはなかった。

汶川大地震の発生当時、私は18歳で、四川綿陽高校で大学入試に備えているところだった。突然の天災で全てが狂わされ、落ち着いていた心もかき乱された。まるで激しく揺れ動く夢の世界に身を置いているような感覚がして、頭がぼうっとした。地震から回復しつつあったある日、甥から大きな赤いりんご一つと一枚の紙をもらった。姉によると「日本人からよ」とのことだったが、不思議に思ってその紙を読んでもみると、おおよその内容とは…

「皆さん、最近いかがお過ごしですか。寒くなってきたので、お体にお気をつけてください。日本のWYと申します。居ても立ってもいられないので、私に出来ることをすることにしました。私が摘んだ

りんごを皆さんに送ります。お爺さん、お婆さん、頑張ってください。今こそ、あなた方の人生経験がものを言う時です。お父さんお母さん、今こそ、目下の人達に強さを見せる番ですよ。若者の皆さん、自分達の素晴らしい郷里を築くために奮起してくださいね。よい子のみんな、怖がらないで、力を合わせれば、何でもできますからね。このりんごは普通のりんごではありません。父のWJが生前に荒れた山を耕して植えた樹になったものなのです。生命力の強いりんごで、希望に満ちた果実なのです。財産より身体、身体より精神が重要です。冬はいつしか過ぎ去り、必ず春が訪れます。これは私達人類全体にとっての災難であり、全員の苦痛なのです。一緒に戦わせてください。頑張ってください！心から声援を送ります。

WYとその仲間達より

感動と共に少し震撼を覚えた。私は長い時間ものを言わず、日中間のたくさんの事を一気に連想し、汶川大地震と関係した日本に関する情報を連想した。それまでも中日関係がらみの報道を見聞きすることはよくあったが、どうせ国同士の関係は、私個人の実際の生活からは遠いものだと思っていた。なので、一面識もないWさんが手ずから摘んだという、幸運と平安を表すりんごが私の手に届いた時には驚いた。まさか私自身の身にこんなことがあるとは。

災難を味わった人は感性が鋭くなるのかもしれないが、長い間考えてから、私はこの「小さな出来事」と自分の感想を“人人網”に書き込んだ。多くの友人がその書き込みを見て、震災後に彼ら自身が味わったり聞いたりした日本人の善意を“晒し”た。みんなの気持ちは驚きに似たもので、まずは感動し、それから以前の偏見や誤解を後ろめたく感じるというものだった。

時間が過ぎるのは早いもので、瞬く間に2011年となった。3月のある午後、同級生に「日本が大変だ、地震だよ」と言われ、私はぎょっとした。無情な地震と津波が日本を襲ったとは。同じような経験と痛みを味わった私には、他人事ではなかった。寝室に戻ると、私は、狂ったように日本の地震に関する情報を全て調べ、サイトを更新して、日本に留学している友人の最新情報を待った。その後、中国政府が日本の被災地にたくさんの物資を寄付したこと、多くの中国人が日本の被災者に募金したことをニュースで見た。時間の大きな傷口が裂けたように、私は3年前の5月に引き戻された。死傷者数は絶えず増え続け、テレビが映す惨状に心が痛んだ。時空が倒錯して混乱した私には、2011年と2008年との区別も、3月11日と2008年5月12日との区別も、宮城や福島と映秀や北川との区別もつかなくなってきた…唯一はっきりしていたのは、また多くの命が絶たれ、多くの家庭が崩壊し、多くの人が居場所を失い、多くの心が苦しみ壊れていることだけ…

手摘みのりんごと真心あふれる手紙が万里の彼方から他国の高校生に届いた。そこには、うわべだけの親切もパフォーマンスもなく、あったのは真心だけだった。“りんご事件”以来、日本に対する私の認識と見方には密かに変化が現れている。その時の手紙はずっと大切に財布の中にしまっていて、人間性の輝きとは、自然災害に破壊された中で益々きらめくものである、ということをお出しさせてくれる。

「良き法は、美德を養う支えとなる」

汕頭市龍湖区人民法院 裁判官 王曉霞

中国の列車事故、リビアの動乱、欧米の金融危機といった事件が続々と起きる中、3月



11日に日本で発生した強い地震と津波は記憶から薄れてきている。今でもぼんやり覚えているのは、日本人が災害に直面した際に見せた冷静さと強靱さくらいのものである。しかし、私は、数ヶ月したある日の報道によって再び日本に目を向けることとなった。警察庁が表した情報によると、3月11日から7月10日の間に岩手、宮城、福島の被災地で回収された金庫が5700個あり、その中にあった現金は23.67億円にも上るといふ。それらの金庫は災害現場を整理する際に拾得されたもので、このうち三県の警察が拾得したものは1,740個で、残りは市民や自衛隊員が拾得したものである。発表時点では、現金の96%、合計22.7億円が元の持ち主へ返された。

この報道を見て、中国の一般人が真っ先に思い付く言葉は、“拾った金を隠匿しない”であろう。“拾った金を隠匿しない”というのは、中国の伝統的な道徳で求められていることなので、当然のことであり、少なくとも中国人の心の深いところにはずっと根付いているものである。しかし、筆者からすると、この件に関するニュースは“拾った金を隠匿しない”というタイトルを貼るだけのものではなく、現在の社会背景のもと日本で震災後に回収された金庫の数の多さ、金額の大きさ、そして元の持ち主に返される迅速さは、私達が考えるに値することのように思われた。

三県の被災地で回収された金庫の約70%は、現地の市民と自衛隊員が拾って届け出たものであり、警察が拾得したものは僅か30%だけである。これと対応するように、金庫の中にあった現金のうち96%は既に元の持ち主へ返されている。これは、日本人の道徳水準がかなり高いレベルにあるということを示すものではなかろうか。だとすれば、彼らが大金の誘惑に打ち勝つことができた原因は何だったのだろうか。

法律の仕事に携わる者として、日本人が欲張らずに隠しもしないことに関するエネルギーと理由を法律の原点から探してみたい。日本では100年以上も昔に『遺失物法』が出されており、近年になって一部が改正された。この法律では、拾得物を届け出ない人は起訴される可能性があるが、自主的に届け出た人は、当該拾得物が元の持ち主に返された後に元の金額の5~10%に相当する報酬を得ることができる。ただし、国庫またはその他の公的機関（警察など）は、報酬を請求することができない。また、同法では警察署を拾得物の届け出先機関としている。このほか、政府は、ネットにデータベースを公開して国民が遺失物を捜しやすいよう便宜を図っている。

こうした事情を知れば、被災地で何千もの金庫が回収できたということも、もしかしたら驚くべきことではないのかもしれない。日本人にとって、“拾った金を隠匿しない”は、遵守せねばならない法律上の義務だからである。

しかし、日本人は、内心では“拾った金を隠匿しない”を遵守せねばならない法律上の義務としか思っていないのだろうか。

法律というダモクレスの剣が掲げられているとは言え、人間の“欲望”は“貪欲”に発展しやすいものである。震災後の混乱の中、被災地の市民は、恐らく誰にも知られない状況で金庫を拾ってしまうことも完全に可能であり、自分の物にしてしまうことすら他人に知られずに済んだことであろう。しかし、事実として、絶対的大多数（百パーセントと断言はできないが）の人は私物化しなかったのである。このことから、日本人にとって、拾った金を隠匿しないことは、法律上の義務と誠実な美徳の完璧に統一であると理解すべきではなかろうか。この命題が成立することを証明する別のデータもある。新華社の報道によると、2004年の日本における遺失物は740万件で、届け出のあった拾得物は1070万件にも上り、これらの中には携帯電話33万台、財布73万個、現金132億円が含まれている。これらの物品は大部分が持ち主の元へ返されている。

モンテスキューの言葉に、「法律は基本的な道徳であり、道徳は最高の法律である」という言葉がある。日本政府が『遺失物法』の精神から遺失物照会データベースを整備したため、震災後に何千個もの金庫が回収されたというニュースからより進んだ結論を得ることができた。良い法律は美徳の養成を促し、美徳が継続することを保証するのである。

『遺失物法』が良い法律であるとする根拠の一つは、物神両面で二重の奨励手段をとっていることである。この法律が拾った金を隠匿しないという行為を肯定し、人を善良に教化する行為の促進作用を果たし、誠実や信用といった道徳への誘導を実現しているのだ。もう一つの根拠は、同法が道徳的な要求と法律規範との関係でうまくバランスをとっているということである。市井に溢れる小市民が、聖人のように振舞えるかは法律ひとつで簡単に決められるものだろうか。道徳は人々に高尚な品行の聖人であることを求めるが、法律は俗人のために決められた規則である。法律規範は、社会が容認できる俗人の悪行のボトムラインを示しているに過ぎない。『遺失物法』は法律の権利本位で、道徳の義務本位に置き換え当事者間で合理的に権利と義務を配分することで普通の人を対象とする法律に調整されている。一定の範囲内で利益を得る欲望を肯定しているのだ。拾得者には報酬の請求権と一定の条件下における取得権を与えるが、社会の構成員ひとりひとりが道徳の模範的水準により自らを拘束することは求めている。同法の実行力を効果的に保証することにより、拾った金を隠匿しないという道徳を最大限に現実化しているのである。

『遺失物法』は、公的機関に対して更に高い法律上の要求をしていて、報酬の権利を主張できないことになっている。これは公的機関の職責が公民の財産を保護するためのものであるからであり、こうしたケースで公的機関が報酬を享受してしまうと、公的機関の社会的趣旨が損なわれてしまうのである。従って、『遺失物法』では、そこに制限を加えることにより、社会の人々に更なる美徳を養う誘因作用を果たしているのだ。

一つ一つの社会現象とその背後にある法律が映し出すものは、社会管理の知恵と水準である。調和社会のシステム構築の過程において、法律は不可欠なプロセスの一つである。良き法は、美徳を養う支えになる。これこそ、大災害が生じた日本が映し出してくれた、私達が学ぶに値する経験なのである。

色眼鏡を通さず相手を見、同様に自分も色眼鏡を通さずに見るのである。日本を観察する角度を正せば、“塩の買いあさり”、“水の買いあさり”、“米の買い込み”といった事件が起きた時、「中国人の素質は、日本人ほど優れていない」などといういい加減な結論を出すことはあり得ない。同じ理屈で、中国を観察する角度を正せば、中国の国民総生産が日本を追い抜いた時の“中国脅威論”も日本で少しは静かになるだろう。

「妖怪文化と畏敬の心」

海南師範大学 漢語言文学専攻 3年 李芯儀



小さい頃、私は、両親が残業のため、家で独りぼっちになることがあったが、あの孤独な夜は得も言われぬ怖さだった。上の階から玉の落ちるようなトントンという音が絶えず聞こえてきて、私は心臓を叩かれるような感じがした。偶然めくれ上がったカーテンの向こうが青紫色の光に照らされ、ぞっとする眺めだった。

真夏の夜なのに、私は押し入れから綿布団を出してきて、きっちりとくるまったものである。分厚くて重たい布団で汗だくになれば、妄想の中の“怪物”を遠ざけることができそうな気がしたからである。

こうして思い出してみると可笑しいのだが、子供の頃は、未知の事物に対して恐れや憧れの入混じった緊張をするものであるし、その感情は成長しても完全に消えるものではないのだ。すっかり大人になったと自認する今でも、あの頃と似た闇夜になると、まだ「そもそも妖怪なんていない」と自分に言い聞かせつつも、奇跡が起こるのを期待してしまうことがある。夜のとばりを切り裂いて、誰かが天から降り立ち、怪しいながらも怖くはない笑顔で、全てが単なる妄想ではないのだと告げてくれはしないかと待ち望んでしまうのである。

大学では日本語を学んだのだが、先生に「日本の何が一番好きか」と聞かれた時には、私は迷わず「妖怪文化」と答えた。あるクラスメイトには「とても奇怪」と言われたが、却って私は本当のことを言えるのは愉快だと感じたものである。私は、以前から様々な神霊伝説の類が異常に好きだったし、“八百万の神”がいると言われる日本は、疑いなく世界で最も神霊文化の豊かな国なのである。こうしたことは、私が日本に触れ日本を深く理解したいと渴望するようになったきっかけの一つでもある。

魔獣が一貫して邪悪なイメージである欧米と違って、日本の妖怪の世界は、正邪がそれほど明確には分かれていない。人の命を奪う悪霊もいれば、無害だったり、時々いたずらするだけだったりの妖怪もいる。人と殆ど関わらずに善悪の境界線を漂って、人間社会の影の中で悠然と暮らしている妖怪はさらに多い。聞くところによると、日本の妖怪の多くは、中国にその原型を見出すことができるそうだが、今や中国には、妖怪文化が育つ土壌は無くなっていて、ホラー映画では人食い幽霊や多情な女の霊といったものが見られるものの、古い神話の妖怪が暮らしの中で言及されることは殆どない。

しかし、日本では、妖怪を題材とする小説、漫画、映画が次々と出てきて、妖怪文化を専門的に研究する学科や学者も増え、目も眩むほど様々な妖怪が人々の日常生活を彩り、不思議で面白い姿を度々見せてくれ、人間臭くて活発で可愛い妖怪が現れることさえあるのだ。日本の妖怪の大多数は人々に嫌われることなど決してなく、むしろ好かれているのだが、これは概ねこうした事情のためなのだろう。そして、私も、世界各地に存在する日本の妖怪ファンのひとりなのである。

『日本妖怪大全』を買ったばかりの頃、私は、いつも寝る前にそのページをめくっていた。何ページか読んで満足してから眠りに就いて、自分が想像する妖怪達と夢の中で出会ったものである。私がずっと抱いていた幻想では、真夜中に人間が表面世界全体を覆う巨大な翼をたたみ、夢の中で最も原始的な自我に戻る時、別の世界からの客人が気泡のように地面の裂け目から現れるのである。彼らは美しい彩りの身体や透明な身体を持ち、人の姿をした者や動物に似た者がおり、物や精神に化け、霧のように変幻自在な姿をとれる者もいる。美麗かつ奇怪、神秘的でオープンな彼らは、最も深い闇夜の中で無数の華麗な伝記を展開するのだ。

妖怪を研究する学者達によると、日本の妖怪文化が異常なほど豊かなのは、日本人が島国に暮らしていることによる不安と密接な関連があるという。日本では自然災害が多発するため、人々は自然が持つ力に対してより深刻で複雑な感情を抱いている。この複雑な感情を的確に総括することができるのは、おおよそ“畏敬”の二文字に限られるだろう。こうした畏敬の心こそ、鬼神に関わる伝説を日本に広く伝播させ、唯一無二の“妖怪文化”を作り上げたものでもある。妖怪の世界は人間界の投影であり、多くの人々が妖怪を好み研究するが、これは決して盲信からではなく、こうした独特で奇怪な想像を通して、人間自身が思想の深くに隠している心理を窺い知りたいと思っているからである。

今年3月に日本で大地震が発生してから瞬く間に半年余りが過ぎた。あの地震を思い出す度、日本に住むある中国人が書いた、地震後の心痛む細かなことが胸をよぎる。いつ来てもおかしくない余震に備え、人々はいつも寝る前にホイッスル、懐中電灯、ミネラルウォーター、保存食を枕元に置いていたと

いう。万一、地震が来て避難できなくても、こうした物があれば、生き延びられる可能性が高まるからとのことだ。この話を聞いて、私の心の中には敬服と悲哀の感情が同時に湧き上がった。痛みを味わっても依然として勇敢さを失っていないこれらの人々は、屈することなく予期できぬ苦難に絶えず立ち向かい、死中に活を得るのである。この絶体絶命の中での冷静さ、そして、それでもどうしようもない状況は、共に私の心を深く揺さぶった。

広い世の中のちっぽけな生命として、人が、世界に対する畏敬の心を終生持ち続けることができるのなら、それは貴く感心に値することなのである。心にいつも畏敬を抱いている人は、自分の足りないところをより意識することができ、豊かな心を持って、悲しみと哀れみを理解し、自省すること、寛大に許すこと、大切にすることを理解するのである。日本の彩り豊かで美しい妖怪文化は、人々の万事万物に対する畏敬の心が特殊な形で現れたもののひとつかもしれない。そこには日本国民の強靱な意志と軽妙さやロマンを忘れない心持が示されている。同時に、長い間衰えることのない妖怪文化も、自然と生命に対して畏敬を決して忘れないよう人々の注意を喚起している。

現代の社会生活のリズムが日増しに加速しているため、妖怪伝説は次第に人々の生活からフェードアウトするかもしれないと言う人もいる。しかし、もし都市の喧噪が静まりかえった暗闇に残る最後の神秘的な息吹を本当に消してしまったら、私たちは、科学技術の発展と文化の進歩に喜びを感じると同時に、かけがえのない多くの物語を失ったことに残念な気持ちを覚えることだろう。つまり、妖怪に驚いて布団に逃げ込んだことがない子供の少年時代は、きっと楽しみも幾分少なかつただろうということである。

「土の下の尊厳」

四川師範大学 数学・応用数学専攻 4 班 王珂旻



昔から“大和魂”と称される桜が見守る下で、滑らかなそよ風が無名の墓のひとつひとつを優しく撫でていく。生花、ミネラルウォーター、そして故人の遺品、こうしたものは忠実な“臨時の墓碑”であり、埋葬された遺体がそこにあることを示している。この公共墓地の写真からは、悲しい影どころか、この地で起きたばかりのことを推測できる人すらいない。

これは、“3.11 東日本大地震”後の宮城県気仙沼市内の身元不明被災者を納めた臨時の共同墓地の一つである。4月24日現在、地元自治体が造成したこの臨時の共同墓地には既に205名もの被災者が埋葬されている。こうした臨時の共同墓地は、被害が深刻な他の被災地にもたくさんある。被災地周辺の火葬場が大量の被災者の遺体に対処できないため、日本政府は、伝染病の流行を防止するという目的で集団土葬を緊急決定した。日本においては、土葬廃止から既に長い年月が経過している。公式統計によると、2009年に死亡した日本人の99.9%は火葬されている。

「一時的に埋葬しているだけであって、二年以内に遺体を掘り出して改めて火葬する。」東松島市環境課の相沢氏は取材に対してこのように答えた。こうした臨時埋葬用の穴は正式な土葬の半分ほどの深さである。遺体は全て、納棺師が一体ずつ心を込めて清めた後、最寄りの臨時墓地へと搬送されるのである。埋葬を担う自衛隊員たちは、日本の伝統である“北枕”を守って遺体の頭を北に向けて安置し、安置する度、整列して敬礼するのである。被災者の遺族は、棺の上に菊の花や線香を手向けて黙祷し、それからスコップで棺に土をかぶせるのだ。毎回数時間に及ぶ儀式のため、仏像を祀った香堂も特別に設置されたが、それらも“臨時埋葬”のためだけのものである。

マーク・トウェインが『バック・ファンショアの葬儀』の中で書いているとおりである。「ある社会

の構造を理解したいのなら、その葬儀を観察することだ。どういう人が最も立派な葬儀をしてもらえるのかを知るだけで、多少のことは分かると古代の人は言ったものだ。」葬儀は人生最後の旅路として、一人の人間の長い一生、或いは短い一生の収穫と期待を載せている。しかも、残された身内のために思いを伝える橋を架けるのである。俗世間的な意味における完結を通じて、ある種のこの上ない円満さに達するのだ。葬儀の礼儀は、早い時代から既に社会の文化の縮図となっており、ある種の儀式を代表するだけでなく、ある社会の人の尊厳に対する保護を表しているのだ。

この点から見ると、日本の大地震後の合同葬儀には火葬の過程こそないものの、自衛隊員の礼儀と現場における一連の儀式の過程は、一人一人の被災者の命に対する尊厳を具現化していると言える。

日本映画には葬儀に関するシーンを含むものが多く、その中でも最も有名なものは、アカデミー賞外国語映画賞受賞作品『おくりびと』である。『おくりびと』は、作品全体の雰囲気想像されるような死と関わる息詰まるものはなく、一貫してある種の静けさと安らぎに満ちている。この映画で最も印象に残ったシーンは、一家4人の老若の女性遺族が遺体の顔に赤く唇の跡をつけ、泣き笑いしながら感謝の言葉を口にしているところである。この時の葬儀には伝統的な厳粛さ、連綿と続く悲しみの涙があるだけではなく、死者が身内と過ごす最後のひと時に家庭生活のような自然で温かい雰囲気が満ち溢れていた。

筆者は日本で葬儀に参列したことはないが、近年の日本の葬祭業界で“死者の普通の生活の再現”を追究するホールが出始めたという話なら知っている。葬儀の形式的な煩わしい虚礼を排除して、それぞれの家柄によって家庭的な装飾、整ったきめ細やかなサービスを提供し、死者と遺族のために“恐れや嘆きがなく、互いに慰め祝福し合う”過程の雰囲気を醸し出して、死者の最後の旅路を生者に共有させるというものである。村上春樹は、日本人に高い評価を得ている『ノルウェイの森』の中で「死は生の対立面ではなく、生の一部を永久に存在させるもの」という言葉で、死そのものに対する自分自身の理解、つまり生死同源を表現している。そして、概ねこれが、近年、日本の葬祭業が大胆な革新を行っている根拠なのだろう。

中国の葬祭業は未だ整備段階にあるとは言え、経済発展に伴い、国家が重大災害における死者の尊厳を保護するという意識は日増しに強まっていることを容易に見て取ることはできる。汶川大地震から暫くして掘り出された遺体は、天気や伝染病などを理由に“消毒後、地中深く埋却“されたが、こうした対応は、被災者の遺族や友人達にとって感情的に受け入れ難いものであった。

玉樹地震後、政府は“死者の尊厳を尊重し、少数民族の葬儀と埋葬の習慣を尊重する”ことを原則として、千人近い被災者の遺体のため、塔葬に次ぐ高級葬—集団火葬を行い、活き仏が数百人の僧侶を率いて死者の霊のため読経して済度した。こうしたことから、これら二度の地震において、死者の尊厳が重視されるようになってきたことは容易に見てとることができる。この点だけでも、充分喜ばしく慰めを感じることである。

日本にしようと中国にしようと、被災者の遺体処理だろうと普通の人の葬儀だろうと、私達一人一人が分かっておかなければならないことがある。それは、生命が果てまで歩きついた時、葬儀という旅はまるで最後の回顧のようなものであること、一人の遺体が深く埋葬される時、沈黙するのは死去する者の外に存在する身体だけではなく、その人の長い一生、或いは短い一生の尊厳でもあるということである。

(2) 二等賞

「災害と命のバランス方程式」

広東省 楊立志

海水が音を立てて迫ってきた時、ビルが轟音とともに倒壊した時、生命が一瞬にして失われた時…人々は心の奥底でどう感じたのだろうか？パニック？無力感？救いのなさ？茫然？私には被災の経験がないので、自分がその場にいたら、どうなっていたのか想像もつかない。

ただ、テレビで見たり、新聞やネットで記事を読んだりはした。東日本大震災の発生時、震源地域や津波が猛威を振るった沿海地域以外では、住民達が通りへ出ていたが、歩道に静かに立っていて、警報解除後の路上にはごみ一つ落ちていなかった。飛行機が地震により遅れても、搭乗待ちの日本人達は騒ぎ立てることも怯えることもなく、静かに本を読んでいた。停電になっても、人々は不平を言わず、当局の指示に従い、自主的に節電を行った。スーパーで「卵、お一人様 1 パック限り」と掲示があれば、2 パックを手取る日本人はいなかった。一部の生活必需品が品薄になったこともあったが、商店は良心的で、値段をつり上げないばかりか、値引きするところさえあった。メディアは携帯電話会社と協力し、携帯電話に無償で震災関連情報を提供した。震災後、被災地域の公衆電話は無料化された。一般国民のこうした振る舞いは、日本人のある秘密を示すものである。その秘密は、「泰山前に崩るとも色変せず」という中国の古い諺で表すことができる。

これほどまでの強さ、しなやかさ。きっと、これほど強靱性のある日本なら、再び大きな災難があっても、きっとまた乗り越えることができるだろう。再び大きな傷を受けても、きっと癒せるはずである。

どうして日本はこれほど強くしなやかなのだろうか？

友達とその話題について話していたら、「日本には地震が多く、日本人が地震に慣れているからではないか。」という意見があった。日本は島国のため、日本人は昔からある種の危機意識を持っていて、有り余る程の困難が彼らの強靱さに磨きをかけたのではないかということである。「世界で唯一、原爆攻撃を受けた日本人は、他の災難など軽いものだと思えるようになったのではないか。」という者もいた。こうした考察のどれも一理あるように思うが、どれが最も問題の本質を突いているのかは分からない。

日本を訪れた時、阪神・淡路大震災記念館を見学したことがある。自分が見聞きしたことから、自分の考えを述べてみたい。

同館では、わずか 7 分間程のものであるが、見る者を呆然とさせるショートフィルムを目にすることができた。それは、1995 年 1 月 17 日、世界を驚かせたあの阪神淡路大震災の記録映画で、多くのシーンが被災地で撮影されたものである。同館には、「人と防災未来センター」というもう 1 つの名前がつけられている。そこには地震の遺留品や資料が数多く収蔵されているだけでなく、当時の災害の惨状や救援を伝える写真も大量に展示されているが、それにも増して多いのは、あの地震を反省するものである。

なぜ、建築物は揺れに耐えられなかったのか？急速な発展の中で、自分たちの街は何を失ったのか？防災や地震対策は、如何にすべきか？「災害後に最も重要なことは、“次の災害が発生した際、同じ過ちを繰り返さないようにすること”、こうした理念に基づき、日本では数多くの取り組みが始まった。建物の耐震設計が強化されただけでなく、より多くの力が国民教育に注がれた。子供の頃からの地震の安全教育を開始した。如何に生き延び、自らを助け、自己責任で自立するか。この“自己責任”意識こ

そ、子供達をルールの制約のもとにいち早く馴染ませ、自他の便宜を最大化する社会秩序を自主的に受け入れることを促すものである。小学校での教育は心に刻まれ、長じれば血肉となり、習慣となるのだ。

人類にとって、大自然がもたらす災害は不可避であり、逃げ切れないものである。従って、否応なく私達はしっかり災害に向き合わなければならないのだ。災害による痛みは個々人のものではなく、集団としての痛みであり、共同して向き合うべきものなのである。災害が起きても、生きていくためには、人が亡くなっても、生存者は前へ進まなければならないのだ。だから、強靭さが必要なのである。これは最も素朴な真理である。つまり、こうした強さとしなやかさは、災害と生命とのバランスを築く方程式なのだ。

災害に向き合い、直視して、軽減し、薄め、やり過ぎし、再考する…。1995年の阪神大震災から今の東日本大震災に至るまで、日本人はこうした強さとしなやかさで、私達と世界に、災害と生命とのバランスを築く方程式を説いて見せた。

だから、この方程式を解ける日本ならば、災難をいち早く脱することができて、再建し復興して新たに飛躍できるはずだと信じられる理由は充分だ。

「苦境にあっても、希望は必ず見えてくる」

山西省 趙春

3月11日の夕方、パソコンのモニターが故障して憂鬱だった私は一つの驚くべきニュースに触れた。一日本の東北地方沿岸で強烈な地震が発生し、津波や放射性物質漏洩事故など様々な二次災害を呼び起こし、人命や財産に深刻な損失をもたらしたというのだ。

その後、中国メディアは絶えずこの大地震関連のニュースを報道した。降って湧いた災難の話に、周囲の誰もが心を痛めた。目の前の壊れたモニターのように、突然やってきた災害と事故により、東北地方は傷だらけになってしまったのだ。何万もの命が一瞬で奪われ、絵画のような郷里が廃墟になり果ててしまって…震災後の日本には、しなければならないことが多すぎる。海を挟んで隣の中国人には、言いたいことがあまりにもたくさんありすぎる。大震災から時間が経ってしまったが、胸の内を率直に述べたい。日本よ、私があなたに言いたいこととは…

日本よ、私があなたに言いたいこと。あなたが受けた災難は、似たような痛みを経験した私達にも辛いものであるということです。中国人の感じていることを一言で語れと言われたら、“同じ気持ちです”ということになります。災難に直面して急に気づくのは、元もと人にはこれ程深く共通するところがあるということです。それは、中国人であっても、日本人であっても。ブン川、玉樹から宮城、仙台に至るまで、地震は私達の冷静さと強靭さを教えてくれました。地震は自然への畏敬の念、命の大切さ、そして互いに助け合うこと、心に刻むこと、恩を感じることも教えてくれたのです。災難を前に、他人の不幸を喜んでほくそ笑む資格など誰にもないのです。距離を置いて傍観を決め込むことさえ、誰にもできないのです。地震災害の救済は、私達が共に担った使命である。お互いに力を貸し合うことは、人として断ることのできない責任です。全ては、ただ私達が一衣帯水の隣人であり、同じ地球村に住んでいるからだけのことです。

日本よ、私があなたに言いたいこと。涙を拭いて、奮起して、頑張る！ということです。私達が涙を流しているのは、私たちの心に余りに多くの悲しみがあるからです。一郷里が地震と津波で破壊され、身内が永遠に去ってしまったとき、涙以上にこの心を表せる言葉はありません。涙は流れるままにしま

しょう。身内がいなくなっても、日々は続いて行きます。街がなくなったら、廃墟の上に新たな街を築くのです。3年が過ぎ、中国ブン川の“5.12”地震の被災者は、兄弟省市の強力な支援のもと、新しい家を立て、新しい郷里を築き、新しい生活を始めました。ニュースによると、彼らの新居は以前よりしっかりしており、新しい街は元より美しく、新しい生活は以前より素晴らしいものだそうです。災難は過ぎ去ります。人と自然があれば、人さえいれば、望みはあると言いたいのです。

日本よ、もう一つ私があるに言いたいこと。あなたは、自分は離れることのできない中国の隣人であると言っていますが、ただでさえ近所なのに、離れることもできないのなら、よく付き合い、よき隣人であるべきだということを、私は言いたいのです。中国にも“遠くの親戚より、近くの他人”という諺があります。遠くの親戚だろうと隣人だろうと、道理は通じているのです。お互いに誠意を持って理解し、寛容に接して、日頃からまめに行き来し、何事かがあればしっかり面倒を見るということです。ご近所さんは行き来すればするほど近くなり、親戚は付き合いば付き合うほど親しくなれるのです。一般市民の暮らしがそうであるように、国と国との付き合いもこうした道理なのです。一方が災難にあった時には、私達は隣人として、より力を出し合うべきです。

2004年のインド洋から、2008年のミャンマー、中国、2010年のハイチ、2011年の日本まで…この世界はこんなにも災難に満ちています。地震、津波、洪水、ハリケーンと、災難が続々と襲ってきて歴史を塗り替え、世間の人を震撼させています。“天地は仁ならず、万物を以て芻狗と為す（天地に慈悲はなく、存在する万物はわら細工のようなもの）”、春爛漫なはずの景色も、時には色濃い悲しみで満たされているということもあるのです。今回の日本の大地震が、また人々の心の中の哀悼の気持ち呼び起こし、その気持ちを大きくしました。善良な人々は、思わずと問いかけてくなるのです。「地球よ、あなたは、いつまで苦しめなければならないのですか？」と。

私が日本に言いたいこと。この世界で災害が発生すると、その影響力は一つの地域、国、州に限られたものではなく、世界全体、全人類へと広がっていくということです。だから、災害が起きたら、私達は互いに助け合って、共に困難を克服しなければならないことを、全ての人々は理解しているのです。「天道人を殺さず」であり、私達は頑張るこの苦境を越えねばならないのです。苦境にあっても、希望は必ず見えてくるのです。

「風を追うアサザ」

四川省 張学梁

去年の8月、妻と娘と日本旅行をした。宿泊先は富士山の麓にある温泉旅館である。黄昏時、風雨が吹き荒れた。窓には青い山、そして滝のように流れる碧い雨水。中庭の池でアサザが風に揺れるさまを見て、私は思わず現存する日本最古の漢詩集『懐風藻』に思いを馳せた。

華美ながらも日に日に氷のように冷たくなっていく今の世界では、人々は時代に巻き込まれて急速に前進させられるばかりで、心穏やかにしてこうした景色を味わう時間など殆どない。この夕靄たちこめる異国の地でひとときの休暇を過ごし、旅で疲れきった足を止め、青い水草が風にそよぐのを見るのは、まさに人生の楽園の趣である。

間もなく雨は上がって、深山の空が青さを取り戻し、柔らかく清らかな風が水に浮くアサザを優しく気ままに撫でている。時折り大粒の雨の滴が落ちると、雨に打たれた葉が浮き沈みして幻想的に姿を変える。突然降りだす山雨に出会うと、アサザは互いに絡まり合って、しみじみと情けを交わしているよ

うである。風雨の中で翻りながら、ひと時の生命のハーモニーを映し出している。澄んだ池に浮かぶアサザは言葉を語らないが、雨露を喜ぶ心や旅する風に焦がれる心は隠しきれない。

「藻、水草の文あるは、故に以て文を諭ふ。」（藻、水草には文とつくものがあるので、文のたとえとする）このように陸機は『文賦』を書き始めている。事実、アサザは昔から中国の文人に美しく描かれてきた。秦観が特に好んだ緑深い山里にあるものも、叙志摩の詩の夕日に映える（ロンドンの）ケム川に浮かぶものも、遠野の静寂やカエルの清池への躍動とともに細やかに詠まれてきた。わずか数文字で静と動が完璧に結びつき、情の余韻が残る静寂な幽玄の世界がある。これ程大自然の艶やかな美しさに人の心を惹きつけるものはない。

「林花は雨を著して燕支を湿し、水荇は風を牽きて翠帯長し」の詩情とは、早春ののどかな東風のよように、青い山へ大海原の向こうへと遠く旅をする。漢や唐の深遠で濃厚な文化が日本に入ってくると、アサザも同様に日本人から深く親しまれるものとなった。歴史が如何に演繹されようとも、また、国境があるとは言え、人間性の深い所にある文化は雄壮で美しいものであり、どうして分割することができようか。

奈良時代、日本の元明天皇の志は四方にあり、積極的に開放を図って、多くの学者を唐に派遣した。彼らは政治、経済、法令など国を統治するための策を中国に謙虚に学ぶと同時に、大量の漢文学創作の経験と漢詩文の形式を持ち帰った。宮廷では詩の宴が始まり、君臣が飽くことなく歌の詠み合いに興じた。こうした雰囲気のもとで色彩豊かで絢爛な文学、漢詩集『懷風藻』が生まれた。

詩集の名称、『懷風藻』とは、昔の賢者の遺風を追想するという意味である。この文集は、日本の漢詩文の発展においては初期段階にあり、物を賛美した歌あり、官僚の志あり、僧侶の述懐ありといったものである。詩集の思想には中国の儒教、道教が明らかに浸透していて、日本文学と中国文学との交流の始まりを示す明確な証となっている。日本の漢文学に言及する場合、上古の日本文学に輝く彩りを添えた『懷風藻』を避けては通れない。

文藻は我が難しとするところ
 荘老は我が好むところ
 行年すでに半ばを過ぐ
 今更になんのためにか勞せん

この詩は越智広江の『述懐』である。素朴で恬淡とした言葉遣いは、あたかも埃の中にある素顔のようである。一見淑やか表情だが、実は人生の大義に対する問いも含んでいるのだ。素朴な感情が長い時空を透過して魂を導き、ある種の通常とは異なる生命の高みを作り出しているのだ。ため息が出てならないのは、世間の埃にまみれて人々がこの問いを発する時には、得てして既に二進も三進もいかない立場に陥っているからである。人生の奥義は深遠で推し測れるものではなく、これに関して明確な解釈を出せる者などいるのだろうか。

中日の文化の脈絡もこれに似ていて、複雑に織りなされている。アサザや藻類のように、同様に溪水を愛し清風を追うのである。『懷風藻』を手にとると、思わず崇高で格調高いあれらの歳月を思い出す。人の世は、どんなに強大な国家であろうと、どんなに勇猛な民族であろうと、長い歴史の流れの中で、ただ違った形で存在する水草に過ぎないのだ。

一面の青空の下で、水草は清流とともに古き調べが漂う景色を成しているべきものなのである。柔軟な生命が自然と交わる時、互いに依存し調和して共生するということを、昔の賢人達はとうに体得していたのだ。あまたの詩文の中でも、才女、薛涛の『菱荇沼』に出てくる「水荇は斜めに緑藻の浮かぶを

牽く」という句には特に心を惹かれる。いつ詠唱しても春風で心が満たされ、柔らかく心を撫でられるような気持ちになる。

歴史を振り返り、過去を見て今後のことを知る。治国国交であるか民間往来に関わらず、棋士であるか商人であるか、はたまた物書きであるか絵描きであるかを問わず…真の名作は、精神の視野が広い人から生み出されるものである。「芳題を撫して遙かに憶ひ、涙の泫然たるを覚へず。縹藻を攀ぢて遐く尋ね、風聲の空しく墜ることを惜しむ」（良い題のもと遙かに思いをはせると、無意識に涙がはらはらと落ちる。生い茂る藻に寄り添い遠くを探すが、風の音がむなしく感じられるばかり）昔の賢人達が広々としている山水を詠んだこの美しい言葉達を、一衣帯水の子孫達は読解できるだろうか。

※アサザ（別名：ハナジュンサイ）ミツガシワ科の水生多年草

「感情」でものを考える日本人

天津市 劉筱璇

まず、ある日本人の友だちについて話しておきたい。名前はSKさん。立命館大学を卒業し、今は天津南開大学の修士課程で、元朝の歴史を専攻している。どうして日本人が中国の歴史にそこまで興味を持って、しかも、はるばる留学までするのだろうか？同じ疑問を持つ人は多いと思う。彼女の答えは簡明瞭だった。「私は草原が好きなのに、日本にはないから。」

自分の好みのため、理性でなく感性でものを考えるのだ。こうした“感情”で考える日本人は多い。小学生の頃から草原に憧れていたからという理由で、毅然として大学の専攻に中国史を選んでしまう彼女のように。中国の子供達はそうではない。中国の子供の多くは、願書を書かされる時に自分がやりたいことなど分かっていないので、何を専攻するのが有利なのか分析するのに両親の助けを借りるのである。自分の未来は、そうやって決めていくのだ。しかし、日本の子供の多くは、Kさんのように、自分の好きなものから自分の未来を決めるのである。そのため、学業成績が優秀な息子でも家業のラーメン屋を継ぐため、大学進学を諦めたり、大学卒業を断念したりして父親に弟子入りなどということが起きるのだ。

日本人は、何を行うにせよ、“感情”でものを考えるのが好きである。まず気に掛けるのは、人がどう思うかであって、それが他人であって、自分であっても構わないのだ。

最近「ハガネの女」という日本のドラマを見た。小学校教員が子供達と一緒に成長し、努力していく内容である。劇中でハガネの女教師が言ったある台詞がとても印象に残っている。「子供達の笑顔のために仕事をがんばる！」この台詞を中国の教員が発していたなら、大方「子供達を優れた人材に育て上げるため、仕事をがんばる！」になるだろう。だから、日本人がものを考える時、いつも感情の昇華の方に傾いていると、私は思うのだ。「子供達の笑顔のために」という発想は、子供達を喜ばせなければというだけでなく、感情面で認知を受けたいという自分の感情にも関わっている。

実際、日本人のこうした“感情”でものを考えるという姿勢は、彼らの生活においても貫かれている。店員が心を込めて挨拶をするとか、人の話を聞く時に「はい、はい」と相づちを打って真面目に聞いていることを表すとか、日本に特有の終身雇用制度とか、挙げ句の果てには日本人自身が自慢にする「日本料理は目でも味わうことができるし、口でも味わうことができる」などというものもある。

しかし、感情でものを考える日本民族は、むしろ情に欠ける民族だと自覚していることが多い。

日本の自殺率は世界の中でも最高で、毎年数万人という自殺者が出ている。一般には、社会や家庭から十分な関心や愛情が得られなかったため、自殺という極端な手段で悩みを解決しようという人が出てしまうのだと考えられているが、別の角度から考えてみると、自殺者自身に問題を受け入れる力が不足していて、他人に心の内を訴える術を知らないということもできる。感情を重視し過ぎるあまり、感情面での本のちょっとした挫折が何十倍にも拡大されて映るのである。また、多くの人が傷つけられることを恐れ、自分の本音を隠してしまう。思うに、そういったことが、日本人が自分は情が薄いと思ってしまう原因ではないだろうか。

自分は情が薄いとよく自覚するというのは、感情を重んじることの裏返しである。

実際、日本人の性格の特徴は、多くが“感情”でものを考えるという姿勢に関係すると帰結される。日本人は総じて謙虚な印象を与えるが、実のところ、それは他人を気まずくさせまいという配慮のためなのである。日本人は“土下座”で頼み事をしたり謝罪したりするのを好むが、これも感情で人を動かす方法の一つである。日本人の考えがきめ細かく、細部を重視するのも、他人を傷つけまいとする行為だ。

私の専門は日本文化と何ら縁のない医学だが、日本の言葉や文化にはとても興味がある。身近にいる日本人の友だちを“実験対象”にして、日本人から色々面白いことを発掘するのも好きである。日本人は慇懃で近寄りがたいと言う人もいるが、実際に触れ合ってみると、こちらが真心を見せれば、“感情”でものを考える日本人はこちらが思うような友だちになってくれる。

もっと多くの中国人が日本を理解し、“感情”でものを考える日本人を理解するようになってくれればと願っている。

「不安は現代人に不可欠」

北京市 丁国強

日本の大地震とそれに続く放射性物質漏出リスクは、世界中に一種の不安を与えた。こうした不安は自然災害に対する恐怖からだけでなく、自らの運命の不確定さに対して内心から発しているものでもある。この極めて大きな自然災害を前にしても、日本人は不思議なほど落ち着きと余裕を保っているが、それで人々の内心の不安をごまかすことはできない。日本の周辺国では、買いだめ行為によって内心の不安を表す者が出た。中国人は食塩を争って買い、ロシアの極東地区住民はワインと食塩の買いだめに走った。こうした行為に科学的根拠は乏しいのだが、大勢になびきがちな人々は、盲目的にそうすることで自分の心を落ち着かせたのである。

世界はフラットである。日本の放射能危機は、災難は誰にでも関係するということを全世界の人々に教えた。文明が発展する過程において、人類は幾重もの不安の中にいる。そして、いつも、数え切れないパニックを経なければ、理性的に成熟した方向へ向かうことはできないのだ。不安をごまかすことはできない。不安は人類の魂の常なのである。人類が生き延びていくには、夢に酔いしれている訳にはいかず、自分自身と外界に関する全ての悪いニュースと直面しなければならないのである。不安は潜在的なものだが、必ずしも皆が慌てふためいている状態として現れるとは限らない。パニックは一時的なものだが、死に対する恐れ、究極の意味の追求はそう簡単には完成しないものである。人の自己設計はあまりに脆弱なので、試練を脱することができたとしても、内心の危機から抜け出せるとは限らない。人

の安全感は反戦や秩序の維持だけによって得られるものではなく、心の充実と自己の完全性によって得られるものでなければならない。さもなければ、欲望が氾濫し、罪悪が流出することになるのだ。

人類の不安は一過性のものではない。連綿と、絶え間なく、微かに続いていくものである。不安は内在的なものであり、人類の心に源を発し、人の発展の不確定性と無限の可能性から来ているのである。現代社会では、自我の真実性が日に日に覆い隠されつつある。現代人は仮面で内心の不安を隠し、人生の不安を曖昧にすることに慣れてしまったのである。生きるストレスだろうと、精神的な危機や信仰の崩壊であろうと、不安は最も直感的なシグナルなのだ。不安の裏側は感覚の麻痺、硬直であり、無気力である。しかし、戦争、核拡散、環境汚染といった人類の限界を超える諸々の不安要素は、人類に壊滅的な打撃を与えている。不安は人類の宿命である。人々は不安の中で凡庸さに抵抗し、また極端な不安の中で郷里、生きていく場所を失っている。農業文明時代のロマン、詩情、温情は、既に埃に埋もれた記憶になっている。不安な人々は、再び昔を懐かしむことにより、ざわついた心を静めようとすることもできず、強い郷愁に幕を引こうとしている。現代社会はより複雑な不安心理を作り出した。この多元化した社会において“不安”の定義を決めることはできない。まして、安易に人格分裂、心理の変容とかいった名詞を使って、安易に表現することはできない。不安がより多い時とは、ある種曖昧な状態である。人々は自分の心にはっきりした境界線を引くことができない。欲望の膨張は危険だが、抑圧や煩悶も人を狂わせるのだ。

戦争、伝染病、環境汚染、乱伐といった人類文明に対する脅威は、目に見えるものである。野生動物の不安、不完全な境界の不安、森林や草原の不安、中東西アフリカの不安など、どの不安も他人事ではない。人類の不幸はしがらみが切れないので、整理しようとしてもできない。人類最大の脅威と不安は人類自身もたらしたものが、災いは必ずしも邪悪を作り出した人物のせいではないという事実を、私たちは当然認めずにいる。価値が覆り、人間性が見失われ、秩序が見えない時代、“悪貨が良貨を駆逐する”社会にあって、多くの不安はそうした邪悪な者、信用を失った者と腐敗した者から来ていることが多い。

日に日に拡大する不確定性と可能性のため、人々は立ち止まることができず、優雅に趣のある安住を求める勇気が持てないのである。不安は単なる一つの過程ではないのだ。人類文明は不安に始まり不安に終わるが、人生もまたそうしたもののなのである。不思議によく変わるグローバル化の現実の前に、人々はそれぞれの形で不安を体験し、不安を問い詰め、不安に対抗している。被害が深刻な地区でも、逃げ出すことを拒む日本人は多い。彼らは不安を受け入れて冷静さに変えているが、理由はただ一つ「これも運命」ということである。こうした忍耐強さと冷静さは、特殊な自然、歴史、社会条件で形作られた民族性の発露であり、日本国民が長期に亘って試練や修行に耐えてきた結果である。一つの民族で最も重要な伝統は、苦難に向き合う態度である。学習することで苦難に向き合わなければ、生存し続けることはできないのだ。ここから言えるのは、平静は不安を認め受け入れた成果なのだということである。

不安は現代人に不可欠な精神的要素である。不安のせいで現代人は落ち着けずにいるが、忘れられた価値や意味を考えさせてくれるものでもある。不安があってこそ、畏敬、節制、慈善、哀れみ、信仰があるのだ。日本社会には念入りに作られた「災害対策マニュアル」があるが、今回の地震と津波の前にはまるで無力だった。技術には限界があるということだ。災難を受け入れる上で、精神力は無視できないのである。

「精神力は無限」

安徽省 許志勇

中国の汶川地震の後、ある日本人が自らもいだりんごと真心あふれる手紙をくれた。万里のかなたから転々として被災地の一人の高校生の元に届いたのである。そのニュースを見た時、私はとても感動した。手紙にあった「財産は身体ほど重要ではなく、身体は心ほど重要ではありません。冬はいつしか過ぎ去り、必ず春が訪れます」との言葉には、また感無量だった。

ある科学者が行った実験を思い出した。死刑囚を手術台に固定して“血を抜いて死なせる”刑に処すと告げ、腕に輸血管を挿入して、輸血管のもう一端を大きな容器に向けたのである。“血抜き”開始後、科学者は死刑囚の目の前で止血用鉗子を取り出し、血管をつまんで止血し、例の容器に水道水を一滴ずつ垂らして血が滴る音に似せたのである。科学者が驚いたことには、一定の時間が経過すると、死刑囚は本当に死亡していたのである。この実験結果は、人は精神が崩壊してしまうと自身も死んでしまうということを証明している。

中国では別の似たような例も出た。ある農民が「不治の病」と呼ばれる肝臓癌にかかったと知って、治療を放棄し、一日一日を生きようと心に決め、毎日しっかりと飲み食いをし、農作業をしたり遊びに出かけたりして、悠々自適の生活を送ったのである。その結果、日々が過ぎ、月々が過ぎ、年も過ぎていった。後にこの農民が身体検査を受けてみると、意外にも肝臓癌は既に全快していたのだった。

この例もまた、精神力が作り出した奇跡に違いない。もしこの農民が肝臓癌を患ったと知って精神崩壊を起こし絶望に沈んでいたら、彼の命はとっくに病魔に呑み込まれていただろう。だが彼は死に神にも病魔にも屈しなかった。楽観的な気持ちと合理的な生活により、身体の免疫力と抵抗力が通常以上に発揮され、最終的には病魔を打ち負かしたのである。

この二つの例からも、人の精神力がいかに強大なものであるかが分かる。人は生きていれば様々な避けがたい危機や困難に遭遇するものだ。どのような精神状態で、どのような方法で困難を克服し危機を逃れるか。そこには能力の大きさが映し出されるのかもしれない。

哲人いわく、世界に「人より高い山、足より長い道はない」。ただ「心の死にまさる悲しみはない」、「天道人を殺さず」という真理があるのみだと。精神の力を信じよう。精神の力とは、潜在能力を極限まで引き出せるのだ。

災害は天が与え給うた甘露であり、私達が強く成長するためのミルクである。気落ちして救われない状態になる時は誰にでもある。その時、そばにいてくれる人こそ、最も気に掛けてくれる友人なのである。その友こそ落ち込んだ時に慰め励まし、苦悩の海から抜け出て新しい人生を迎えられるよう助けてくれるのだ。こうした友情は精神の拠りどころであり、またそれ以上に、強大な精神の力でもある。だから、友人に対しては、普通は遠くから黙って祈りと祝福を捧げていればいいが、災害が起きたり友人が困難に直面したり時には、その友情を封じておく必要はなく、声を掛け、寄り添って、手を取り、力を貸し、苦しみを分かち合って困難の克服を助けてやることのできるのである。その時、あなたが友人にしてやれる最大の手助けは、精神面での慰めと力なのかもしれない。

災難に直面すると、人間性の輝きともろさを特に感じるものである。天災や人災に直面すると、人は恐れを抱きがちだが、困難に打ち勝って情勢を逆転する精神というものもある。それは堅持と知恵であり、それは災難に対応する技であり手法なのだ。力強く、こだわりを持って日々を送ることである。こ

れは、生活を特定の一部、一枚の映像、一つの記憶にとどめるということではない。生活は私達の記憶によって定まるものではなく、日々新たになるものなのである。「毎日、新しい日が昇るのだ」。

日本で大地震が発生して数ヶ月、友愛についてのニュースをよく見かけるので、私はこうした感想を抱いた。「越えられない火山はなく、渡れない砂の川もない。」きっと、精神さえ崩れなければ、日本人はいつか地震の影を抜け出せるはずであると、私は考える。

「一碗からピースフルネスを」

上海市 李笠藜

日本の「3.11」大震災関連報道に、「日本の大地震が文化にもたらした痛み 128件（箇所）の文化財に深刻な被害」と題されたニュースを見つけた。今回被災した文化遺産には、茨城大学五浦美術文化研究所岡倉天心旧居も含まれている。

岡倉天心（1863－1913）は明治時代の著名な美術教育家で思想家であるが、私は、彼が英語で記し1906年にニューヨークで出版した『The Book of Tea』を読んだことがあるので、かねがね彼の名前を知っていた。同書は20世紀初頭に欧米へ日本文化を紹介した重要な著作のひとつで、その後、多くの言語に翻訳された。深遠な影響力を持ち、今でも再版書が出回っている。100ページにも満たない薄い本には、茶道という伝統文化の独特な審美眼や、茶室、生け花、茶道の大家などの概要が紹介されていて、日本の茶道を理解するための啓蒙的な読み物として、読者に与える印象は深い。その冒頭、第一章の標題は「一服に人情を見る」となっている。

しかし、岡倉天心には今でも世間から非難されている点もある。彼が著書『東洋の理想』で提示した「アジアはひとつ」（Asia is one）の観点が、第二次大戦における日本の侵略政策思想の源だとされているのである。こうした非難の原因は、アジア文化の観点を誤読し乱用したことにあるのかもしれない、という研究者も当然いる。

岡倉天心の功罪については、賛否両論だが、彼が設計し「茨城百景」に名を連ねる六角堂は、今回の大地震で津波に吞まれてしまった。

しかし、茶道はその根強い生命力により日本で伝承され続けており、現代の中日文化交流においても重要な地位を占めている。特筆すべきは、茶道が民間において盛んであるだけでなく、正式な国交においても一定の地位を得ていることである。

2008年3月、胡錦濤主席が「中日青少年友好交流年」のオープニングイベントの中で、中日の茶道実演を観覧し、両国の青少年に次のような言葉を贈った。一中国の茶芸は日本の茶道と方法は異なるが同じ効果を持っている。それぞれ特徴があるものの、いずれも「和」の精神を強調している。つまり、仲よく暮らし、調和して共生するという精神である。両国の青少年がお茶を縁に、和を以て貴と為し、相互の理解と友情を増進して、中日友好に多大な貢献をしてくれることを願う。

2011年5月、第6回東アジア茶文化シンポジウムが北京で行われた。参加した日中韓の学者達は、茶は文化の絆であるばかりでなく、調和した社会、ひいては平和な世界の絆でもあると認識を新たにしていた。お茶を媒介に日中韓の三国間交流をより進展させるべきだと発言する参加者もいた。

こうしたお茶をテーマとする友好交流活動は、1979年に初めて中国を訪問した現代の日本茶道界の第一人者である大宗匠・千玄室が提唱した「一碗からピースフルネスを」の理念と切り離すことはできない。この理念は数年に亘って広範に推進され、長い間実践され続け、広く認められている。

中日の茶道の源は極めて深い。今、中日の茶人が「和」の理念において再び偶然の一致をみている。2010年の上海万博では、中国の茶人がこれを機に集まり、国連館で「世界調和茶会」を成功させた。百か国に近い各国館のスタッフが代表で茶会に出席し、互いに茶を献上し合って、中国式の茶会と友好的な雰囲気を経験した。このイベントで出されたスローガン「一つの地球、一つの国連、一杯の中国茶」は、世界平和への祈りを示すものである。

以上のいずれにおいても、茶道という伝統文化の表現様式は根強い生命力により今まで伝えられ、平和の使者に演繹されるようになったことが改めて示されている。現代の茶事は盛んであり、中日の茶人がお茶を仲人にお茶を縁に結ばれ、中日の茶道はまた期せずして一致して「和」の精神を広めている。

岡倉天心が世を去っておよそ百年、『The Book of Tea』の登場からも既に百年余り経つが、その記念建築は今回の大地震で損なわれてしまった。お茶は、東方文化の特色をよく備えた、平和を象徴する小さな葉っぱであるが、とどまることなく中日両国の間を往復し、世の人に東方の美学を広めるのみならず、平和と友好に対する憧れを伝えてきた。「一眼に人情を見る」から「一碗からピースフルネスを」まで、世の中の形ある物は作られ、存在し、壊れ、無に還ることを避けることはできないが、人々が平和を求める願いは代々ずっと伝わっていくのだとことを思わせずにはおかない。

「日本の教育から展開を」

北京市 孫黙

ある国を見ようという時、私は教師なので、最初に見るのは教育制度である。今年の3月11日、日本で世間を震撼させたマグニチュード9.0もの強震が発生し、列島に計り知れない損失をもたらした。しかし、地震後の日本人の振舞いは平静で秩序があり、深い悲しみの中にあるというのに、互いに助け合う態度は、私のような外国人にはむしろ不可思議にさえ思えた。被災後の写真には、落ち着いて普段通りに整然としている様子を捉えたものが何枚もあり、何事にも屈せず困窮から立ち上がることができる民族の力が現れているが、これはまさに現代教育が探求する命題である。

教育の根本は人間性の涵養である。日本の教育制度は中国と同じ6、3、3、4制であるが、そのうち前の二つは義務教育の段階である。日本の義務教育は、早くも1920年から99%にも達していた。そのうち6～12歳の小学校教育は特に賞賛に値する。児童は人生の啓蒙段階であり、特に道徳、観念、能力の培養に気をつけるべき時期である。私達は通常、子供のうちに善悪の判断を学び、読み書きを覚える。物事に対する最初の印象は、初恋と同様、成人後の志向を決めてしまうことが多い。

高校生の時に読んだ黒柳徹子の『窓際のトットちゃん』は、言葉が明快で暖かみがあると深く感じた覚えがある。分かりやすい叙述の中には、クラスのある問題児に対する教師の深い愛情を見て取ることができる。愛は、人類にとって、最も基本的な技能である。本の中の校長は、家庭の貧しさに苦しんでいる生徒の一人一人に支援の手を差しのべている。学校に余裕がなくとも、生徒達には工夫溢れる「山の幸、海の幸」を味わわせたのだ。そうして積み重ねられた愛は、彼らが成人すると流れ出すようになったのである。

ただ、日本人も受験志向の教育による弊害を受けたことがある。教育に対していくつか偏狭なところがあったのである。彼らは全ての学生に知識を学ぶ能力があると考え、学生の努力、継続力、自律能力、学術面での能力が学業成績を決めるものとみなしていた。これらの学習や行動習慣は統一的な授業と訓練によって身につくものである。従って、義務教育では彼らの能力に合わせた授業を行っておらず、生

徒の個人差に適応したものではない。このため、日本は近年来 50 年間でノーベル賞受賞者を 30 名輩出すると豪語した後、教育制度上の弊害改革に力を注ぎ、教育に科学研究を大規模に導入して特定実験基金を設立し、政府が特殊な学生の“考え”に青信号を灯した。最初の 10 年で 3 名のノーベル賞受賞者が出て、世間を賑わわせたものである。

なぜ日本人は“言ったことは、必ず実行する”のか？その答えは集団意識に関する生涯教育にある。日本の学校には用務員がおらず、清掃や給仕など普通の校内に必要な作業については、全て各クラスの生徒が協力して行っている。教育関係者であるひとりの友人が日本で研修を受けてきた後、私に過激な感慨を語ったことがある。「日本の子供は本当に手に負えないよ！」きっかけは、彼らが小学校を参観し、児童達と給食を摂ったことだった。配膳は衛生服を身につけた日本の小学生が行い、一同は並んで順番待ちをした。食べ終わると、彼らはまた片付けを待っていた。その間、友人は料理を食べ終わっておらず、未開封の牛乳を片付け中のお盆に載せたところ、小学生が傍にやってきて、料理も牛乳も“きれいに空にする”よう懇願し、その後、ようやく食器を回収したという。しかも、彼らは牛乳パックを潰して専用のトレイに入れ、さらに別の児童が食堂へ運び回収に出していたのである。日本の小学校教育において、“食事”を完結させるということは完全に一連の行動であり、一同が協力して連携し合、各プロセスが順調に引き継がれていくことで、やっと腹を満たすことができるのである。

この話には驚嘆を禁じえず、日本の集団への協力意識と責任感に関する教育は、本当にきめ細かなものであると感じた。それ以外にも、多くの学校では学年に関わらず“二人三脚”など協力する能力を試す競技を設け、児童達が多くの方で一致団結を忘れないよう促すことに努めていた。だからこそ、地震などの災害が発生した時、心を一つにできるのだ。それは単なる物理的な助け合いではなく、精神レベルで早くから存在している信念—私達と国は一緒だ—なのである。心に団結力がなければ、地域の限界を超えて協力し、限りない可能性を創造することはできない。

東日本大震災後に日本人が世界に示した態度は客観的で明確なものだった。私達は災害に屈せず、一時的な資源不足を恐れもしない。涙を流すよりも、国と仲間が自分の手を引いてくれること、そして共に郷里を再建することを信じたほうがよい。これは早くから日本の教育理念に埋め込まれ、代々傳承され教え継がれてきたものである。中国の現代教育はこれを参考に、キャンパスの“1990 年以後現象”や“サブカルチャー”への対策をすべきであり、一人一人の教育従事者が深く再考するに値するものである。

「もしも自分が宮崎駿監督だったら」

広東省 張梓燦

日本が大地震という災害に見舞われたと知って、直ぐに私は関心を寄せている日本の著名人に関する情報を血眼になって探し求めた。私が非常に崇敬している日本アニメの大家、宮崎駿先生もその中のひとりである。

その時、心と珍妙な考えが私の頭をよぎった。もし自分が彼のような真善美に満ちた心を持つお年寄りだったら、日本で大地震が発生した後、一体どんなことを考え、話し、行うのだろうか。

もし自分が宮崎駿監督だったら、私は日本の被災者に「僕たちは絶望する必要はない」（宮崎監督の談話より）と語りかけたい。

『もののけ姫』の和尚は、「一面の凶作が呪いのせいだとしたら、世界全体が呪われているのだ。重要なことは、死によって頭を狂わされてはならないことだ」と話している。地震と津波が発生したことで、“2012年世界の終焉”なる迷信に囚われ、混乱、恐怖、絶望に陥る人が現れた。しかし、なぜ、あなた方は買いだめや自殺までして内心の恐怖を吐き出したのだろうか。忍耐強さで世界に知られる日本人が、そんなにたやすく打ち負かされてしまったのだろうか。

『もののけ姫』では、度重なる対戦を経て姫が腕を失ってしまうが、それでも彼女は穏やかに「始めからやるだけ」ということを口にしていく。地震が発生し、あなた方は災害がもたらす巨大な変化と放射能の影響に直面せざるを得なくなった。しかし、どうということはない、始めからやればいいではないか。重要なのは、気にせずしっかりと勇気を持って最後まで歩むことである。

『千と千尋の神隠し』では、両親が突然ブタになってしまうという事実が、小さな千尋に深い孤独と恐怖心をもたらす。後には友人である白の助けも失うが、最後には臆病だった少女が両親と友を救うために努力して成長を遂げるのである。彼女が誰よりもはっきりと生きていたからこそ、両親の命はつながったのであり、あの素晴らしい友愛を得ることができたのである。だから、“自分だけが助かった”ことを気に病まないでもらいたいし、「あの人たちがいなくなったら、生きていけない」と落ち込んだり恐れたりしないでもらいたい。あなた方がより良い生を送ることこそ、亡くなったり行方不明になったりした身内や友人達の一番の慰めになることを心に留めておいて欲しい。そして、あなた方は孤独ではない。世界の善良で温かな友人達が、共に災難を乗り越えようとしている。

もし自分が宮崎監督だったら、日本の大地震に対して異なる考え方の人達に「世界の問題を解決しようとは思わないが、世界に憎悪、殺戮、暴行があっても、素晴らしいことも存在するということを伝えたい」（宮崎監督の談話より）と語りかけたい。

1937年という年から、中日両国には微妙ですっきりしない関係が始まった。日本の大地震後、中国社会には様々な観点が見られた。他人の不幸を喜ぶ人もいたが、同情する人はもっといた。ヒューマニズムと狭量な民族主義が社会全体の上で交錯し、個々人の思想のなかで交錯することさえあった。

『紅の豚』では、戦争に反対したせいでブタに変わってしまったポルコが「ファシストになるぐらいなら、ブタのほうがまだ」と自嘲気味につぶやいている。何が言いたいのかというと、実際、日本の民間にはこうした反戦主義者がたくさんいるし、中国人と仲良くしたがる友人もたくさんいるということだ。もし、日本人は誰でも好戦的な野心家であると決めつける人がいるなら、その人には宮崎監督の作品を見るよう勧めたい。少なくとも、宮崎監督は絶対に平和の使者だからである。もう二度と狭量さと憎しみで人間性の輝きを遮ってしまわないで欲しい。本来の善良な心を偏見で覆い隠してしまわないで欲しい。こうしたことは恨みを解決する最良の方法ではないのだ。たとえどんなに難しくとも、皆さんには愛を信じ続けて欲しいのです。現実世界には儘ならないことが多くても、愛で晴天を支えることはできるから。

世界に何が起きても、私たちはそれらを平然と受け入れざるを得ないのだ。私たちが暮らすこの世界では、悲痛な災害や恐るべき邪悪な事件、自分たちでどうしようもない様々な問題が起きたりするが、私は『となりのトトロ』のキャッチフレーズを次のように書き換えたい。“幸福”、この不思議な生き物はきっとこの世界に暮らしていて、私たちが勇敢で素晴らしい心を持ち続けることさえできれば、きっと出会うことができるだろうと。

「福島の花」

四川省 周夢娜

1844年、福島の地に一人の偉大な女性が誕生した。彼女は、“幕末のジャンヌ・ダルク”や“日本のナイチンゲール”と称えられる、同志社大学の母、新島八重である。

八重は、会津藩の砲術師範、山本権八の娘で、幼少から女性の手仕事より銃器に興味を持っていた。戊辰戦争では、スペンサー銃を携え、500人の女子と共に会津若松城の防衛戦に参加し、そのため、“幕末のジャンヌ・ダルク”と称されている。明治の中頃には、彼女は“日本初の看護士”という身分で従軍し、“日本のナイチンゲール”と呼ばれた。戦後、八重ら女性看護士16名は、皇族以外の女性として初めて褒賞を受賞したが、女性の能力がおしなべて低いと見られていた時代にあっては、こうしたことは画期的なことであり、女性が社会に踏み出す第一歩となった。

八重は勇敢で強い女性であったが、より感銘を受けるのは、世俗に揺らぐことのない堅固な心を持っていたことである。戊辰戦争の前に八重は但馬出石藩校教授の川崎尚之助と結婚していたが、若松城の防衛戦が始まる前、人妻である八重は封建社会の男女の秩序に公然と挑み、自ら夫に離婚を切り出したのである。1876年、彼女は“明治時代の六大教育家”の一人、同志社英学校の創始者である新島襄に嫁いだ。封建文化に囲まれた生活環境も彼女の男女平等の願いを打ち消すことはなく、彼女は敬語を使わなかったばかりか、夫を“ジョウ”と呼び、“奇妙な関係”という周囲から夫妻に向けられた批判の目も気に留めることはなかった。彼女は、世間の人々に“日本初の悪妻”とさえ呼ばれた。それでも彼女は毅然とした態度で、自分の生きる道をしっかり歩み続けていくことに執着し、ついには優秀な教育家、西洋学者、茶道家との名声を残したのである。

女傑、新島八重は、福島の地に咲いた奇跡の花である。一世紀以上が過ぎたが、今の日本においても、彼女の勇敢さ、強さ、世俗に揺らぐことのない堅固な心は重要なものである。“3.11”大地震と原子力事故を経験した福島の被災者にとって、身内を失った痛みは時間が癒してくれても、新しい郷土は自分の両手をまめに使って再建できても、様々な俗世間からの目は自分の努力では変えることができない。

深刻な被災地である宮城県、岩手県と比べても、福島県は、地震と津波による生命や財産の損失を克服しなければならないだけでなく、原子力発電所の事故による巨大な傷をも負っているのである。福島の被災者は多いが、その大多数は原子力発電所周辺の住民で、“放射能難民”のレッテルのために、彼らの避難生活は他の人々より多くの辛酸と無力感に見舞われているのだ。日本列島全域で、多くの国民が“放射能と聞くと、顔色を変え”、福島の被災者は心ない言動の直接の被害者にもなってしまうのである。報道によると、3月中旬、福島県南相馬市から船橋市に避難していた小学生の兄弟二人が、公園で遊んでいた時、現地の子供が“地方の訛り”を耳にして、出身地はどこだと聞きに集まってきたという。兄弟が“福島”と答えたのを聞くと、その子供達は声を上げて逃げ出した。そして、逃げながら“放射能注意”と口にしていたという。兄弟は泣きじゃくりながら、一家が身を寄せる親戚の家に帰ったのである。両親はその理由を聞いて大変心を痛め、福島市での避難生活に戻ると決めたのだ。

厚生労働省が報道機関へ提供した情報によると、他県の旅館が放射性物質検査安全証明書を提示できない福島県人の宿泊を拒否したり、タクシーが福島県人の乗車拒否をしたり、葬儀会社が福島県の地震や津波の犠牲者の遺体を受け付けないというケースまであったという。西日本にある岡山県では、賃料の安い住宅に入居申請した福島県人が様々な口実で拒否されたのである。“放射能難民”をもっと傷つけたことは、福島県内の一部の地域でも差別を受けたことである。現地の新聞によると、福島市に避難

している南相馬市の女子児童が、福島市の病院で皮膚病の診察を受けようとしたところ、“安全証明書”がないことを理由に拒否されたという。ニュースでは、医療関係者は常人よりも理知的に放射能問題を扱うべきであると続いていた。人だけでなく、農産物、水産物、福島県のごみまでが“差別”を受けているのである。神奈川県川崎市の市長が福島県を訪問した際、地震と津波による廃墟のごみ処理を手伝おうと好意で提案した。しかし、僅か数日間で、川崎市役所のごみ処理計画課は2000本以上の反対電話を受けたという。

こうした差別や流言飛語と向き合うには、政府が最前に立って人心をなだめ、核問題の専門家と医学専門家が関連知識の普及に努める必要があるし、福島の被災者については、自分自身の心の強さがより重要なのである。福島の女傑、新島八重が身をもって示した勇敢さ、強さ、世俗に揺らぐことのない堅固な心こそ、まさに今の福島県人が必要とするものなのである。一たとえ外界からあれこれ誤解されても、人々が生活する勇気を失うことなどあり得ない。時が流れて正しい科学知識が広まるにつれ、こうした偏見を抱く人達も、次第に口を噤んでくるだろう。それまでの間、まずは強く生きて欲しいのだ。たとえ他人の考え方を換えられないとしても、自らの生活態度と世界の見方は変えることができる。一時的には冷たい眼差しも、災害への恐怖と無知から来るものなのであり、全ては素晴らしい生活が到来するまでの試練と見なすことができる。

心の強さとは、まさに全ての事物を包容して征服できる偉大な力なのである。八重は、あの時代、男尊女卑の巨大な圧力のもと、動じることなく堂々と、勇敢にしっかりと自らの生きる道を歩み続けたのだ。彼女は一介の女性でありながら、自らの力だけで、強大な現実と頑強に立ち向かい、そして最終的には社会からの承認を獲得したのである。100年以上も経った今、再び福島県人はよく似た困難に直面している。しかし、今の彼らは独立独行で戦っているわけではない。結局のところ、人類の善良な本性から来る温もりと支えがまだ主流なのである。だからなお更、福島県人が勇気を失う理由はなく、八重が成し遂げられたことは、彼らも同じように成し遂げられるのである。

誰よりも早く帽子を被り、革靴を履いて、ゆったりと優雅に街頭を散歩していた八重、その常に旧習と相容れない姿は梅の花に喩えられ、俳句にも詠まれた。「世の中の 春に先立つ 梅の初花」八重の強靭さと粘り強さに根源を持つ、きらきらと美しい福島の花が、再びこの地上で満開になることを願っている。

「先生がくださった二冊」

北京市 盧学麗

私の机の上には2冊の本が置いてある。1冊は稲森和夫の『働き方』で、もう1冊は呉曉波の『大敗局』である。

どちらも、私が私の指導教師から頂いたものである。私が幸運にも大学院生として張先生について間もなく、私は先生から最初の本『働き方』を頂いた。先生は50数歳で、母親のような慈悲と優しさで私達全ての学生に気を遣ってくださる方である。先生は、私が農村の恵まれない家庭出身であることも、省都所在のある普通大学から中国政法大学に入学したため、基礎がそれほどしっかりしていないということもご存じである。先生は、新しい環境に入ったばかりで落ち着かない私の心情を見抜き、私をご自宅に招いて斬新な図書『働き方』を手渡してくださった。「私は、法大に来たばかりのあなたの気持ちとプレッシャーを理解できますよ。プレッシャーに打ち勝つには、努力をなさい。稲森和夫さんの精神

を学ぶといいでしょう。きっと何ごとももっとできるようになります」と心のこもった言葉を添えて…。私は懸命に頷いた。

その夜、私は、電気スタンドの下で稲盛和夫氏の精神を初めて感じ、日本人の仕事の態度を悟った。稲森氏は大学で有機化学を専攻していたが、幾つかの理由により最終的には有機化学の分野に進まなかった。彼は、未知の専門分野と業務環境に対して気落ちしたり尻込みしたりすることはなかったし、会社が破産して彼しか残らなかった時でさえ、仕事を離れることはなかった。彼は仕事を愛することに努め、自分の子供を抱くかのように実験材料を抱えて寝たことさえあった。そうした情熱と安定した心を持っていなかったら、基礎から始めた彼が、会社を最終的に世界 500 強企業に押し上げることはなかっただろう。

稲森氏は、次のように語っている。「熱愛中の恋人は、傍目には呆然としそんなことがあっても、落ち着いて対処する。仕事も同じであって、夢中になって、心から愛してこそ、苦しい仕事でも長く続けることができる。こうした姿勢を貫けば、恨みも後悔もすることはない。」「自分で仕事をし、仕事は自分ですするという境地に達してこそ、全身全霊で仕事に打ち込める。」と。彼は自らを“自己発火型”人間に育て上げる努力をしたのである。事業を成就させるためには、自ら燃えることのできる人にならなければならないからである。仕事を心から愛して自分の火種とし、自分の情熱を全ての人や物にまで浸透させるのである。

私は、彼の精神に深く震撼した。日本人は昔から、落ち着いていて、厳格で、目標が明確であるということでは有名だが、日本人の優れた特質をここまで一身に集めた人は珍しい。こうしたことは、まず起こりえないことであるが、稲森氏には起きたのである。日本は小さいが、その意欲と戦闘力は決して弱くない。それは、日本が自分の弱みを明確に理解しているため、全力を尽くしてほぼ完璧に自らの忍耐力を示し、最終的にある精神を日本人から引き出し、こうした戦闘力を日本の至るところに広げてきたからである。

指導教師は、研究の第二学期に二冊目の本『大敗局』を私に下させた。驕らず、焦らず、小さな成果に心を奪われないようにすること、さもなければ、即、敗北へ突き進むことになるとの教えだった。この本も、私の最愛の書の一つである。『大敗局』の三文字は、驕らず高慢にならぬよう、いつも私に警鐘を鳴らしてくれる。呉曉波氏の『大敗局』は、改革開放の数十年來、中国の一部民営企業が苦境の中でどのように苦闘しながら成長し、遂には一時的な輝きを得たが、それでも劣勢を脱することができなかった有様を記録したものである。その中の原因には深く考えさせられるものがある。浮き足だったり、巧妙に立ち回ったりすることを避け、物質的な誘惑と罟を回避しなければならないということである。勿論、偉大なる環境との関係をより良くする必要もある。全ての要素が調和した時、私達は成功から遠くない位置にいるはずだ。

巨人集団（上海巨人網絡科技有限公司）、秦池酒、三株口服液…全ての輝きが黄ばんだ写真に納まっている。あの時代の若者には勇氣、戦闘力、燃焼力があつたし、創業に歩み出す時の落ち着きと、一歩ずつ進む戦略があつた。しかし、成功と失敗は一夜のうちに決まってしまう。私達は“野蛮な生長”をしてきた。“大敗局”は、決して決定的な状態ではない。私達は今でも前に進んでいるのだから。

私の机の上にある二冊には、東洋人の知恵と生命力が詰まっている。私は、『働き方』により日本を少し理解することができた。日本人は不屈の民族であり、その忍耐力と戦闘力が依然として強大であるということを知ったのである。日本は地震、津波、放射性物質の漏出など大小様々な災難を経験したが、日本人の精神はこうした困難に打ち勝ち、その精神をより輝かせ、伝承し続けていくと、私は信じてい

る。こうした初歩的な認識の中で、個人的に恥ずかしさと悟りを覚えたこともある。新たな時代の若者として、私達は、些細な事でも勇気と活力をもって一つ一つ着実に片づけていってこそ、私たちの才能は成功への道をゆっくりと歩めるということである。『大敗局』は、吸収することのできる一種の教訓を私に与えてくれたのだが、この教訓は生涯に亘って私の役に立つことだろう。おかげで遠回りを減らすことができるのだから。

「もののあはれ」

山東省 呂盼

日本人は美しいもの、特に“もののあはれ”の美しさを好む。日本列島は優美で心地よい自然の風土に恵まれているが、資源は相対的に乏しく災害も多いため、日本人には哀悼を尊ぶ気質が形成された。“もののあはれ”は悲哀、悲しさ、悲惨さと解釈されるだけでなく、哀れみ、同情、感動、さびといった意味も持っている。“もののあはれ”は感覚的な美であって、知性や理性で判断されるものではなく、直感や心で感じ取るものであり、心でしか感じ取れない美しさなのである。

自然災害が頻発する小さな島国は、日本人に個体の矮小さを深く感じさせた。生命の無常と短さは、桜のようであり、最も美しい時が世を去る間際の時なのである。日本最古の歌集『万葉集』では大部分の歌が繊細な感情で詠まれており、悲しみや恨みに満ちている。この中に「秋づけば、尾花が上に置く露の、消ぬべくも、我は思ほゆるかも」と詠まれた一首があるが、この歌の中で作者は露の宿命に人生の無常をたとえ、自らの悲しみと憂いを託している。

いわゆる“もののあはれ”とは、懸念に対する解答のひとつでもあって、日本に対する理解はいつも懸念から始まり、懸念は物語の出発点である。人は疑問を持つと、往々にして遡及していくものなのだが、追えば追うほど、最終的には一定の懸念が生まれてしまうのである。日本では風に舞う桜の花は、もののあはれの心をととてもよく表しているものである。桜は美しいが、美しい時期は長くはなく、一般的に一株の桜の花は咲き始めてから三、五日程度の寿命しかない。人々は満開の桜を愛で、解き放たれた青春を味わうと同時に、花が乱れ散る瞬間には、風に舞い落ちる花吹雪の中に生命の脆さと青春の短さを感じ取り、より深い趣を感じるのである。

日本人は、古来、自然を愛し人為的なものを嫌うが、これは日本人独特の美的感覚である。日本人は抽象的な表現能力に欠けるため、具体的で直感的な表象にますます関心を払うようになる。自然を感じ取るというのは、もちろん単に自然を観察するというのではなく、自然物の心に入り込むことであって、真の万物が個人の魂の力を借りて情緒として表れてくるが、その背後には思想や道理が隠されているのである。

もののあはれとは、哀しく荒んだ心境から生み出される悲劇の美であり、憂鬱の美である。生命に対する哀れみであり、歳月の無常に対する感傷である。これは日本の伝統文化の核心的な部分であり、日本文学的一大特色でもある。

日本の伝統文化には婉曲的で含蓄のある悲しみや気高い感情の悲壮さがあり、こうした点は『平家物語』、『源氏物語』の中に見ることができる。『源氏物語』から敷衍し形成された“もののあはれ”という日本的な美学名詞は、当然、日本民族の思考法の特徴を最もよく表しているということができる。“もののあはれ”は表象と感情の結合点となり、日本文学の伝統的な審美観念の核心となっている。

日本の芸術の美を最も理解する民族とは、世界中で恐らく漢民族だけだろう。茅盾は、「1920～30

年代の中国は多くの優れた作家を輩出したが、彼らと日本留学の経験とは大いに関係がある。」と述べている。多くの中国の作家が日本文化を熱愛するのは、内心から発することである。郁達夫は、日本の文芸美の特徴について次のように語っている。日本の文芸は「希薄さの中に独特の趣を出し、簡単さの中に深い意義を込めている」と。それは「空中のそよ風、池のさざ波のように、始まりも終わりも分からず、飄々としなやかなものである。ごく短い言葉でも、よく反芻すると、長い年月を経てもオリーブのように噛めば噛むほど深い味わいがある」というのだ。戴季陶は、「日本の山水は、全て、静かな趣があって精緻で、工夫を凝らした見事な彫刻のようである。こうした明媚な風光は、当然その国民の美的感覚を養うものである。」と言っている。

“もののあはれ”という審美的観念は、心にあるインスピレーションが感じ取るところを表すものであり、主に“一瞬の美”を強調している。それは、瞬く間に過ぎ去る瞬間の感銘の一つであり、その時に生じる微妙な情緒なのである。自分の心が感じ取るところを重視する日本人にとって、現実の物は単なるモノに過ぎず、特殊な環境の下で表れる美しい瞬間こそが永遠なのである。

もののあはれ意識は、日本人の感情の世界に浸透していて、日本人の生活様式に影響し、この民族の心理的遺伝子の一部となっており、ここから道理を受け入れない極めて壮烈な行為が派生してくる—

山口百恵は、芸能人として最も光り輝き最も華やかな時期に決然と引退したし、芥川龍之介、太宰治、三島由紀夫は、文学の最高峰を創作した時に自殺した。武宮正樹、大竹英雄などの棋士は、対局中に全軍が壊滅したとしても、“美しい指し方”を放棄しようとはしなかった…

日本では津々浦々に“伊豆の踊子”像があるが、本物の“伊豆の踊子”（1990年代の初めまで生存とのこと）は、終生その姿を現さなかった。これは、彼女が人々の心にある踊り子のイメージを自らの老いた姿により損なうことを危惧したためである。

“もののあはれ”の薫陶は、日本人の精神世界を変えた。もののあはれ意識は、日本で生まれたものであり、島国の特殊な地理的環境と非常に大きな関係がある。日本列島は、古来、霧に覆われることが多く、自然の風光が与える印象は、朦朧として移ろいやすいものである。雪山、砂浜、谷川、峡谷、温泉、滝、青々と茂る林、錦のような花々、橋がかかる小川、静かで趣のある庭園—これほど多くの美景が狭い地域に集中している国は、世界の中でも日本だけだろう。噴火、地震、大雪、津波、台風、戦乱—これほど多くの自然災害が日本のように古来頻発してきた国もない。長年に亘って日本人がいつも見てきた美しさは、束の間のものであり、烏有に帰すものなのである。そうした全てのことから、素晴らしい事物は不安定なものであると、彼らは信じるようになったのである。そして仏教の伝来により、日本人はそうした認識をさらに強くしたのである。

日本人の国民性の特徴として、彼らが残月やほころび始めた蕾や散る花びらをより深く愛するのは、そうしたものの中に哀れみを誘う情緒が潜んでいて、そのことで美感が増すと考えるからなのである。その無常の哀しさと美しさこそ、まさに日本人の“もののあはれ”の真髄なのである。

“もののあはれ”は死生観の一つでもある。その主体は“一瞬の美”を求め、美しい瞬間に“永遠不変の静寂を求め”ことをいとわない。このため、生命の一瞬の煌めきを追究すること、これがもののあはれの重要な特質なのである。生活の中に浸透しているもののあはれこそ、大地震の悲しみから彼らを解放し、彼らが再び奮起して新しい生活を始める力になれるのかもかもしれない。

2. 「笹川杯作文コンクール 2011」～日本語で応募～

※日本語の原文のまま掲載しております。

(1) 優勝

東北大学日本語系 4年 劉倩

「日本、私があなたに言いたいことー 津波被災地の少女への手紙ー」



愛海ちゃん、お元気ですか？

あなたは私のことを知らないけれど、私はあなたのことを知っています。「まなみ」と読むんですね。4歳の女の子でしょ。今、親戚の家に住んでいるでしょ。お母さんに「ままへ生きてるといいね お元気ですか」という手紙を書いたでしょ。手紙を書きながら眠ってしまった写真が新聞に印刷されましたね。自分の写真を見ましたか？ とても可愛いですね。

その新聞であなたのことを知りました。お父さん、お母さん、2歳の妹さんが津波で亡くなりましたね。何度も読んで、涙が止まりませんでした。「愛海」は美しい名前ですね。海が大好きで、いつもおいしい魚を採ってくれた漁師のお父さんが、そんな美しい名前をつけてくれたのでしょうか。

今、あなたの寝顔の写真を見て、すこし安心です。夢を見ましたか？ 夢でお母さんに会いましたか？ いま、お母さんは童話の天国にいますよ。白雪姫と七人の背が低い人たちと幸せな生活を送っています。雨はお母さんの涙、風はお母さんの息、雷はお母さんのくしゃみ、太陽はお母さんの笑い。愛海ちゃんはお母さんの姿が見えないけれど、お母さんはずっとあなたのそばにいますよ。ずっと愛海ちゃんのことを見守っています。

きょう、愛海ちゃんは何を食べたか？どんな服を着ているか？何を勉強するか？友達と遊んでいるか？身長はどのくらい伸びたか？体重はどのくらい重くなったか？お母さんはすべて知っていますよ。だから、元気で大きくなってください。そうすると、お母さんも喜びます。青空にいつも太陽の笑いが見えますよ。

「生きてるといいね」たしかにそのとおりです。4歳のあなたが書いた言葉の深い意味に気づき、驚き、感動しました。人間は生きているから、希望が満ちます。生きているから、奇跡が造れます。朝、眠りから醒め、太陽は光輝き、雲は空を漂い、鳥は歌を歌います。とても幸せですね。生きているから、愛海ちゃんはこれから、長い道を歩くのです。

人生は冒険みたいです。アリスのようにいろいろな面白いところに行き、いろいろなやさしい人と出会い、いろいろな不思議なことを経験できます。未知と困難がいっぱいあります。でも、心配しないで。冒険の道程は楽しみも満ちています。そして、冒険の道であなたは一人ではない。みんなはずっとあなたのことを支え、信じています。お母さんも微笑んで、あなたのことを見守って、神様に加護を祈ります。

愛海ちゃん、中国人の友達を作りたいですか。ここに一人のお兄ちゃんを紹介したいです。お兄ちゃんは林浩と言います。11歳です。2008年北京オリンピック大会開幕式の中国選手団の旗手ですよ。北京国家体育場、「鳥の巣」を行進しました。すごいでしょ。彼は中国四川省からきました。3年前の四川大地震のもっとも小さな救災英雄なのです。小学校2年生だったお兄ちゃんは、自分の怪我をもとめせず、一人で校舎と校庭を往復して下敷きになった4人の同級生を救いだしました。災難にあつたとき、小さな子供でも不思議な力を出すのです。お兄ちゃんは中国人民のヒーローです。家を失った

お兄ちゃんも今、人生の道を冒険しています。そして、同じ道で愛海ちゃんを待っていますよ。

ここまで読んでくれたら、愛海ちゃんはこの手紙を書いた人はだれだろうと疑問を持つでしょう。私は中国人です。劉倩（りゅうせん）といいます。今、瀋陽市にある東北大学の四年生です。私を劉倩お姉ちゃんと呼んでください。愛海ちゃんのような妹がほしいです。専門は日本語ですから、日本文化、日本人の国民性についての知識を少し身につけました。

日本人が好きな言葉に「一生懸命」があるでしょ。勉強や仕事のことで「がんばります」とよく使うでしょ。日本人は自分の仕事にわが身を捨てる精神があります。日本人の勤勉なところ、正確さを追究するところ、団結するところ、律儀なところ、こうした国民性は外国人にとって、勉強すべきところがたくさんあります。

日本の大震災は悲しい出来事でした。でも、その災難に立ち向かう日本人の姿は世界の人々に感動を与えました。自然を受け入れる大きな器を持ち、子供でさえ取り乱さない冷静さ、身勝手な行動を慎む心、不安な生活を送りながらも、前に向かって冷静に一步一步進もうとする精神を、われわれ中国人も見習わないといけないと思います。4歳の愛海ちゃんに、そういう話はうまく理解できないかもしれませんが、ただ一つだけ理解してほしいです。あなたは日本人ですから、どんな困難でも打ち勝てます。だから、悩まないで、迷わないで、夢に向かって、わくわくする冒険の道を歩いてくださいね。

私は、愛海ちゃんのことを大好きです。寝顔を見ただけで、しっかりした女の子であることがちゃんとわかります。今後の道は長いです。私はずっと愛海ちゃんのことを応援します。

中南林業科技大学日本語系 4年 羅紫薇

「思いやりの心—日本の大地震に思うこと—」



人間はお互いの支え合って生きてゆくものです。一人の力だけで生きてゆくことは誰もできません。何があっても、他人の気持ちを察して、他人の身になって考えることが大切だと思います。これこそ思いやりの心というものではないでしょうか。

私は今年の7月から今年の7月まで日本に留学していました。中国で地震を経験したことがほとんどない私、東京で今回の東日本大震災を経験しました。正直にいうと、地震と言ったら、すぐ倒れた建築、廃墟の下に埋められた体、さんざん泣き叫ぶ姿など次々と頭に浮かびます。私にとって、地震は死と絶望などのイメージと結び付いています。

地震発生から、すでに半年以上に経ちましたが、今までもその日のことはまだ記憶に新しいです。その日午後2時45分にアルバイト先についた私は店長さんとあいさつをしたとたんに、突然大きな揺れを感じました。それに、アルバイト先の室内は木造の内装だから、ぎしぎし音がしていました。外を見ると、道路を通りかかっている人が急に立ち止まり、大きな揺れに耐えられず、近くの電柱に手を伸ばし、しっかりとつかむところが目に入りました。それに、近くの高層ビルは振り子のように大きく揺れ、外に逃げる社員さんの姿も見えました。それを見て、不安で居ても立っても居られなくなり、私は早く逃げようと言わんばかり、店長さんを見つめました。

でも、店長さんはずっとにこにこして、平気な様子でした。た日本人は、もう地震に慣れているからでしょうか。でも、私は平静ではいられませんでした。次の入ったニュースを聞いていると、私はますます心配で頭が真っ白になりました。親の元から遠く離れたままもうすぐ死んだら、親はどれほど悲しむのか、またやりたいことがいっぱいあるから、死にたくないと考えて、これまで感じたない瀕死感

にせめられていました。

その日東京ではJR全線が止まり、もう寮に帰れなくなり友達や家族に心配をかけるのではないかと
思って、さらに怖くてせつなくて、私の目に思わず涙があふれてきました。

けれども、その時、一緒に仕事をしている店員さんは「大丈夫だよ。私たちがそばにいるから」と声を
かけてくれました。また、店長さんは「ご両親はきっと心配しているだろう。連絡して」と言って、パ
ソコンを貸してくれました。それに、「お腹空いた？おにぎり、食べてね」と店員さんは作りたてのお
にぎりを私に渡してくれました。また、店員さんたちから「心配しないで。きっと大丈夫だよ」「泣か
ないで、お菓子食べてね」「頑張れ」という多くの感動的な心遣いに私の気持ちも少しずつ晴れて、不
安も解けてきました。その心遣いにある国境を越える温かさに心が癒されました。「日本にいても、私
は一人っぼぢじゃない」と私は気づくようになりました。

地震発生から私はずっと店にいたまま、時間は深夜12時を過ぎました。店長さんは私の帰りたくてな
らない気持ちを見通したようで、ある店員さんに私を車で寮まで送らせると言ってくれました。通常で
あれば、電車で40分ぐらいの道のりを3時間もかけて、私を無事に寮まで送り届けてくれました。私
は店員さんたちに感謝の気持ちでいっぱいでした。私は深くおじぎをしながら、「どうもありがとうご
ざいました」と言う以外ほかの言葉が出てきませんでした。

震災の後、あるCMで次の詩歌が流れていました。それは宮澤章二さんの書かれたものです。「心は誰
にも見えないけれど、心遣いは見える。思いは見えないけれど、思いやりは誰にでも見える」というも
のです。私もそれを確信しています。思いやりの心は一種のやさしい気持ちで、家族や友人などの親し
い関係に存在するだけでなく、さらに国境を越えて人と人の間の深いつながりとなると思います。

目を覆うような災難は確かに恐ろしいものです。降りかかる災難は人々につらい思いをさせますが、そ
こから現れてきた愛の絆と心遣いは傷ついた心をなぐさめると感じました。

災難は人々に絶望をもたらしますが、思いやりの心は人々に希望を与えます。ですから、皆さん、思い
やりの心で生きてゆきましょう。

(2) 二等賞

三江学院 池芸芸

「日本の大地震に思うこと」

三月十一日、インターネットで、「東日本でM9.0の巨大地震が発生しました。」という記事を見
た。日本は地震多発国だと知っていたが、こんなM9.0の巨大地震は発生したことがない
ので、大いに驚いて、本当のことだと信じかねた。しかも、地震だけではなく、大津波の襲
来を招き、原子力発電所事故も併発して、日本の人々は人命、財産に甚大な損害を被った。



地震発生後、私は日本の名古屋にいる母の安否が気がかりでならなかった。友達もメール
で、母のことを尋ねて、心配してくれた。新聞で、家屋が全部倒れ、町が水浸しとなり、泣
きながら子供が両親の姿を探しているなど、いろいろな痛ましい記事を見て、心が痛くなった。そし
て、口では言えない気持ちになり、ますます母のことが心配になった。やっと、母と電話が繋がり、
名古屋は震度4の地震であったものの、放射能の影響はないと聞いて、ちょっと安心した。そして、
母に早く帰国してほしいと伝えた。ところが、母が「まだ帰りたくない。」と答えた。「どうしてです
か。今の日本は危険ではないですか？」私は心配して、たくさんの疑問が頭に浮かんだ。だが、その

後、母の気持ちが分かった。母は、もう十年以上日本に住んでいるので、いつの間にか、日本に対して、特別な感情が出てきたのだと思う。母は、もう日本を第二の故郷とするかもしれないと思う。日本の生活にすっかり慣れていて、日本人との付き合いも深まっているから、母は日本が好きになっていると思う。

たびたび日本へ行っている私も、いつの間にか、日本に特別な感情をもつかもしれないと思う。日本人は非常に責任感を重視すると思う。彼らは放射能が漏洩する危険な所でも部署を守ってがんばっている。自分の生と死は度外視して人々に奉仕している。生命は確かに貴重で、国と人々のために身を犠牲する人は本当にめったにいないと思う。私はずっと信じていることは、人間は一番危ない時に一番偉大な行為をするに違いないということだ。多くの感動させられることが伝えられた。

「人民中国」に、会社経営者の佐藤充さんが中国人研修生を真っ先に避難させ、自らは犠牲になったことが載っていた。「佐藤充さんは時間と駆け足している最中に、自分の家族ではなく、研修生を先に救った。二十人の研修生の一人でも亡くしてはいけないと思って助けてくれた。その後、自分の家に戻った佐藤充さんは海水に巻き込まれて、姿が見えなくなった。」と研修生は涙を流して述べている。研修生たちは産みの親から命をもらったが、佐藤充さんに再生の機会をもらったと思う。読んだ時に、私は涙が出るほど感動した。

今回の大災害に対して、日本の人々が慌てず騒がず、整然と秩序を守って行動したことに、私は深く印象づけられた。本当に恐ろしいことに、地震や津波や放射能漏洩事故でとても酷い被害が出たのに、災害に負けず、力を合わせて、復興に取り組んでいる姿に私たちは頭が下がる。地震はひとつごとではない。地震を前に、人類全体が天災という共通の敵と戦い、また、互いに助け合うという共通の責任を果たさなければならない。災害に遭遇した時は、どんなに小さい援助でも人々の心に希望の灯を灯すことができる。

日本の隣国としての中国は、当日に、日本政府に対してお見舞い電を送付した。時を置かずに、中国救援隊が岩手県に入り、救援行動を行い、国内ではさまざまな団体と組織が義援金活動を開始した。さらに、ネットには、「頑張れ！日本」という激励する言葉が多く寄せられ、精神面で被災民を支えた。あの時、中国の各地で日本の大震災に対して支援の輪が大きく広がった。その活動から中国人の真心を見ることができるだろう。中国も日本も漢字を使っているから、「愛」の一字には「心」があることを皆が知っている。「愛」の心で、援助の手が差し伸べられている。中日両国は切っても切れない一衣帯水の隣国だ。中日双方は歴史を忘れてはならないが、過去に寛容に対処し、心から真の友好関係を構築しなければならないと思う。

そうだ。救援には国境がない。愛にも国境がない。私たちは自然を支配できないが、国を越えて、災害対策に取り組み、被害を少なくできる。自分の心を強くすることができる。そして、相互に助け合ううちに、心が通いあうようになる。

日本の大地震をとおして、日本人の社会や人々のために貢献する心や決してあきらめずに最後まで努力する姿に感動した。私も母のように日本が好きになってきた。

「支え合って生きていこう」



僕が初めて、日本で大地震が起きた事を知ったのは、下校中の地下鉄の中だった。一緒に乗っていたクラスメートの一人が、携帯のニュース配信を見ながら言った。

「日本で地震があつたらしい。」

その時、僕は何の気にも留めなかった。日本で地震が起こるなど、良くある事だ、と思っていたからだ。小さい頃、僕は日本に住んでいて、ちょっとした地震など、殆ど日常茶飯事だと知っていた。

「マグニチュード 8.9らしい。」

彼は付け加えた。

僕は一瞬ギクツとした。こりゃ大きいな、大変なことになっているだろう、と僕は思った。日本にいる友達は大丈夫だろうか？日本で働いている叔父さんは大丈夫だろうか？小さな不安が僕に訪れた。

「そりゃいい話だわ、何々？」と、もう一人のクラスメートがニュースの詳細を見る為に携帯を奪っていった。

その言葉を聞き、僕は心が詰まった。なんだ、これのどこが「いい話」なんだ、と、僕は彼女のこころを心の中で責めていた。しかし、言葉には出せなかった。雰囲気気まぐれささせたくないからだ。なぜ彼女はあんな言を言えたのだろうか？やはり、日本と中国の間の歴史的怨念のせいなのか？

日本と中国の間に過去の怨念があるのは確かだ。そのせいで、中国と日本が友好な関係を結んだ今となっても、日本に対して抵触感を抱いている中国人が存在するのも事実だ。ある中国のウェブサイトで、「日本大地震に救援を出すべきかどうか」についてアンケートを調査したところ、80%が「救援するべきだ」を選んだのに対して、残りの約20%が「救援を出すべきではない」を選んだ。

その20%のなかには、只の冗談で選んだ人もいるかもしれないが、それでも僕は心底憤慨した。

子供の頃日本に住んでいた僕にとっては、こういう事には異常に耐えられなかった。僕は、日本の子供達と一緒に授業を受け、一緒に下校したり、一緒に道草を食ったり、一緒に遊んだりした。共に笑い、共に泣き、共に成長した。中国人、日本人、そんな区別など無邪気な僕たちは気にしたりしなかった。国籍を意識する時は、中国独特のお菓子を自慢げにあげる時くらいだけだった。僕らは様々な思い出を作った。その思い出たちは、今でも大切であり、一生大切であるだろうに違いない。

中国人と日本人、それらの区別はただ地域と文化であり、所詮皆は同じ人間、同じ掛け替えのない儚い命だ。皆、自然災害の前では手も足も出せない時もあり、一人一人が大切な、大切な命だ。国籍など、過去の怨念など、命の大切さの前ではどれも口ほどにもない小さなものだ。

2008年中国で四川大地震が起きた時、沢山の人は怪我をし、命を奪われた。その時日本を含む多くの国々が救いの手を差し伸べてくれた。その為、多くの命が救われた。又、2011年日本で大地震が起きた時、中国も救いの手を差し伸べた。

両国のお互いの救い合いのおかげで、多くの人々が助けられた。

過去は忘れるべきではない。だがそれは、過去の怨念を根に持ち、相手を憎むことではない；それは、過去の失敗を生かし、より良く共に今を生きることだ。

故に、今中国と日本の間では友好な関係を結んでおり、中国の多くの人々も日本に対して友好的になっている。両国の文化交流や、貿易など、頻繁に行われるようになった。

地震などの自然災害が起きた時も、中国と日本は互いに助け合い、困難を乗り越えてきた。僕の学校でも、日本大地震の為に募金をしたり、学生たちで応援の千羽鶴を折ったりした。

もう、国と国の間の戦争や小競り合いなど、小説や映画などの物語の中にしか存在することにすぎないで欲しい。例え国が違くとも、皆は同じ人間、誰もが掛け替えのない命だ。過去の怨念をいつまでも根に持ってはいけない、共に最近頻発に起こる自然災害に対して努力するべきだ。僕たちの敵は自然災害であり、お互いではない。

今後も、日本と中国がお互い友好な関係を保ち、共に努力し、自然災害の前で、及びその他色々な方面で、支え合って生きていく事を、僕は願っている。

(3) 三等賞

大連工業大学 韓璐

「日本の大地震に思うこと」



中国では、最後には生まれ故郷に帰って落ち着くという伝統的な考え方があります。この考え方によって、故郷とはどれほど重要なのかということが明かにされています。身の程知らずに、いつも何とかしていわゆる自由を得ようとして青春時代を体験し、今故郷の存在をもっともっと大切にしたいと思っている私は、今度の日本の大地震について、いろいろ見聞きしたことで、より深く理解できたような気がします。

今年3月11日、皆さんはどこで何をしていたでしょうか。私たちはいつものようにごく普通の日を過ごしていた時に、日本では史上空前の大地震が起こり、多くの被害がもたらされました。一瞬の間に幸せな生活が消え失せました。思いも寄らない大地震と津波は、家屋や財産や多くのものを奪い去りました。更に、故郷から遠く離れたところに移らなければならない人も数多くいました。親がいなくなった子供の泣き声や、家族を亡くした人の悲しい顔、そして故郷とつらい別れをした人々の姿は毎日テレビに出てきました。最も印象深かったのは、取り壊されて平地になった故郷に向かって、深くお辞儀をしていた女性の映像です。一日も早く故郷に帰りたいという声は被災者皆の本音です。テレビの前で、私は感動をうけ、涙をこらえ切れませんでしたし、感慨もひとしおでした。この先、故郷のことを気に掛けながら被災者はどのようにして、どこへ向かうことになるのでしょうか。

2008年中国の大地震が起こった後、身も心も傷つけられた四川省の何万人の被災者は、仮の住まいで苦しい日々を送りました。苦しみを乗り越え、被災者たちは国内外からの援助のおかげで、廃墟の中で新しい町を築き上げました。皆は離れることなく、あくまでも生まれ故郷を守りました。八ヶ月が経って、国を挙げて皆で中国の伝統的な祝日・春節を祝った時、私はテレビでこういう画面を見ました。その新しい町では、家々に明かりが灯り、一家が団欒し、来年の幸せな生活を望んでいました。その上、部屋がよく整っていて、清潔な新しい校舎を見て、心より笑っている子供の笑顔が胸に焼き付けられました。我々人間にとって、故郷は永遠の港のような存在で、たとえ心が傷だらけになっても、慰められるところです。故郷というものが心があれば、すべてを乗り越えることができます。

今、日本の被災地の皆さんも明日の幸せのために、精一杯頑張っていると思います。時が経つことで、どんなに大きな地震であっても過去のこととなっていきます。すぐには故郷に帰ることができなくても、故郷はずっと私たちのことを深く見守り続けてくれています。苦くても笑顔で今を生きてい

きましょう。

被災地の皆さんが幸せになることを願わずにはられません。

揚州大学 倪雨晴

私は日本に恋している



幼い頃、ある夏の日、家の庭で遊んでいたら、母に聞かれたことがある。

「晴の夢は何？」

「わからない」

と私は考えもせずに答えた。

「じゃ、将来は何をしたい？」

母は私の顔をじっと見つめて何かを期待しているように見えた。

「わからない」

素っ気ない私の答えに、母のいつもの優しい笑顔が急に消えてしまったように思えた。その時、母の瞳には親として子供の私の将来に大きく期待する、何か水晶のようなきれいなものが流れていた。その時の母の瞳は子供なりに深く私の記憶に残っていた。

あれから何年かがたった。思い出すたびに母のあの眼差しが気にかかるようになった。そもそも夢というのはなんなんだろう？そんなことどうでもいいじゃないと思っていたのだった。

趣味ならたくさんあった。ピアノとか絵画とか結構好きだったが、それも中途半端な性格のため最後までやりきれなかった。すばらしい青春を無駄にしたような悔しさが残ってしまった。いつか、また夏がきた。あるきっかけが大きく私を変えた。それは大学に進学して、日本語と出会ったことだ。とてもうれしかった、新しく生まれ変わったような気がした。毎日が輝いていて、日本語を学ぶのを楽しんでいた。日本から来た交換留学生のバディーを自ら進んで希望し、お付き合いさせていただいたおかげで、日本人の友達もたくさんできた。今度こそ夢を見つけたのだと確信していた。

しかし、ショックを受けたことがあった。日本語を教えてくださった先生と話をしていたら、「私は日本が嫌いだ」と言われたのである。意外なことばに理由も聞けなかった。クラスメートたちも似たようなことを言った。東日本大震災が起こった際、周りに喜ぶ人たちがいた。

「昔日本人が中国にした悪行にとうとう罰があたったのだ」

と震災に苦しむ人たちを悼む心は少しもなかった。残酷すぎると思った。

なぜそうなるのだろうか、一度犯した罪はいつまでも許されないのだろうか。

そんな時、突然母から電話がかかってきた。思い悩んでいたことを全部ぶちまけた。

「おかあさん、なんで皆日本が嫌いな、日本を好きになってはいけないの。」憤激のあまりに声が震えた。電話のむこうで、母はただ黙り込んでいた。少したって、落ち着いた声でこう言った。

「晴の夢はなに？」

思いがけない質問に思考が止まった。

「それは…。」

母は聞き続ける。

「晴は将来何をしたい？」

「わからない。でも、日本はきっと皆の思うような悪人ばかりの国じゃないよ」「なら、みんなを納

得させて、そのために頑張ればいいじゃない」

その瞬間にふと気がついた。母の言った夢というのは別に大きなものでもない。それはただ自分の気持ちに素直になることだ。もっともっと多くの中国人に自分の思いを認めさせただければ、そのために頑張ればいいと教えてくれているのだ。

同年の7月に、私はありがたい機会を得て、日本を2週間ぐらい訪問した。その目で自分の信じ続けてきた日本の姿を確かめたのだ。日本人は電車の中で他人に迷惑をかけないように携帯電話をマナーモードにし、絶対大声で話したり騒いだりはしない。TOTO という世界一のトイレを作る会社を見物して、私はその最先端を走るすばらしい技術と行き届いた設計に驚嘆した。こうした日本人の礼儀正しさや思いやりの精神、先端技術と自然にやさしい物づくりの理念、それらはわが国が日本から勉強すべきものだ。

最後の日に発表会が行われた。発表のテーマを「私は日本に恋している」に決めた。私はこう発表した。「私は日本が好きだ。好きで好きで言葉で表せないぐらい、恋しているように心が引き付けられている。そして、自分の夢は中国の人たちに真の日本を伝えることだ。日本人は人を殺すような化け物ではない、皆やさしい心を持つ人たちだということを信じてもらいたいのだ」と。

日本を去る日、乗り込んだ飛行機の窓から、青空がいつもより明るく見えた。母はもうこの世にはいない。でも、きっとどこかで日本と私の絆を見守っているに違いない。やっと夢をもてた私に優しく微笑んでいるのだろう。

ふと窓の外を眺めると、見送りに来た日本人の先生と友達が必死に手を振っていた。なぜか胸がきゅっと詰まった。何かを叫びたい気持ちになったが、頭が真っ白になった。ただ心の中にある音が響いた。

「ありがとう、日本」

大連大学 畢利文

日本—私があなたに言いたいこと



日本語を勉強し始めたとき、堅苦しいしきたりとか規則とかに面倒くさいなと思いました。でも、好きになる一方で、日本語はほんとに面白いと思うようになりました。特に、いろいろなドラマを見てからこそ、本場の日本語を味わいながら感動をうけました。日本人に言いたいことがあるかと聞かれれば、絶対にあると答えます。

初めて日本のことを接触した時、やはり戦争からでしょう。なんかよくないイメージを持っていました。しかし、今私は中国人の大学生だから、冷静的に、客観的に問題を考えなければなりません。戦争なんかもう昔のことになりました。現在の世の中は平和を求めており、美しい生活を作るために存在しているといっても過言ではありません。というのも、現在、地球村の中で、国々は触れ合いしないと発展することはありえないでしょう。ですから、各国の相互理解も大事なことになりました。

まず、日本人に言いたい言葉は「中国へようこそ」。なぜかというと、皆さんをご存知のように、五千年をわたって輝いている悠久な歴史を持っている中国はいつまでも、微笑で友人を迎えます。中国人の学生として、いろいろでえらいことを紹介したいと思っています。私から見れば、もし中国にきたら、見にいかなければならないところがあります。一番は非常に景色のすばらしい雲南省を迷わずにあげます。その美しさは人をうっとりさせ、自分の存在を忘れてしまう程度です。自然に自分

の心を開いたら、自然もきっと扉をひらくでしょう。私は二年前に、大理に行ったことがあります。その記憶は一生の宝物として大切しようと思います。そして、雲南省の豊かさに追いつかないけれども、江南地方も名所なのです。

普通は水のあるところは靈妙な感覚になりやすいです。江南地方はそうです。その空気、川、水、古い町、石など、すべての物は心を癒し、気持ちを落ち込ませる働きがあります。想像してみませんか。小船に乗って、沿岸の古い家を楽しむことは夢みたいものではないでしょうか。おそらく、それは才能のある人々がここに心を傾ける要因でしょう。例を挙げると、「雨巷」という詩歌が一番の代表に違いありません。要するに、広い国土を持つ中国では、赤みたい熱情のある町もあれば、黄色みだいたい明るく地方ちもあります。大家族の中では、56民族は助け合いつつ、生きています。踊り好きのタイ族、親切であるモンゴル族、鮮やかな衣装を着るミョウ族など、それぞれ特徴があります。ですから、見る価値があります。数えても、数え切れないでしょう。

もし、皆さんは中国に来たら、決して後悔することはないことを信じています。私たちは皆さんのご来中を楽しみにしていますよ。

では、参観に値するところは言いましたが、古代から残っている優秀文化もいっぱいあります。孔子先生といえば、誰も聞いたことがあるでしょう。その作品「論語」は何種類も訳されていますし、国内外で人気がある本になりました。そんな注目を浴びていることは、私たち中国人にとって、非常に光栄だと思われています。

伝統的芸能として、「唐ごま」という遊び方があります。残念なことに、私はしたことがなかったのです。それから、四川省にして見える本場の芸能、すなわち、面を早がりさせることもかなり人気がありますよ。また、農村には、お年寄りにしてできる切り紙細工も特別で、春節のとき、さまざまな切り紙ものが窓に、壁に貼っていきます。もしも、その飾り物がなかったら、節の雰囲気も盛り上がりません。ただ、このようなことは、少しずつ変わっていき、現代の流行要素も含まれて、もっと巧みなものを作るはずがあるらしいです。

知らず知らずのうちに、日本のことは少しずつわかってきて、中国とは違っている文化も了解しました。もっとも感心したのは日本人の礼儀正しさです。現実の中でも、ドラマの中でも私は、ずっと感動を受けています。一年前、長崎のある女子学校の実習生がうちの大学に自習にいらしゃいました。先生が指示したとおり、私は「ガイド」を担当させました。彼女たちの世話をすることになりました。もともと、「私、できっこないわ」と思ったが、彼女たちの優しさは私を励ましました。その一か月間、すごく楽しく過ごしました。後悔でも、残念でもありませんでした。最後の日に、涙が溺れている私たちは、メールアドレスを交換しました。今までも、連絡しています。永遠の友よといわれて、うれしくてたまりませんでした。もし、将来、機会があれば、ちゃんと捕まえて、日本に行きたいと思っています。

また、うちの大学の日本人の先生からも、いろいろと勉強になりました。二年生になったとき、先生たちとおしゃべりすることは好きになりました。知らず知らずのうちに、日本語ももっと上手になった着て、ほんとうに感謝します。

ある自習の先生はそろそろ日本に戻ることにになりました。「日本にいても、中国にいても、私たちはある見えない輪でつながっています。どこに行っても、皆さんはその輪の一部として重要です。」先生はそういいました。確かに、輪があるでしょう。見えなくても、心に定着しています。では、その輪をもっと広く、もっときつくなるように頑張りましょう

「どんな決定をしても支えます」
—日本、あなたに言いたいこと—

日本へ



君を最初に知ったのは五歳のときでした。ウルトラマンのおかげで、君がこの世界に存在していることがわかるようになりました。

私はウルトラマンが大好きです。宇宙から地球にやって来て、正義のためにさまざまな怪物たちと戦って、ずっと人類を守ってきています。こんないいヒーローを作ってくれて、ありがとう。でも、あの時、君の声を直接聞くことができませんでした。中国で上映しているウルトラマンの声は吹き替えだったからです。一度父や母を困らせたことがありました。「どうすればあの人の本当の声を聞き本当の姿が見られるのか」と言う私のことを、父も母も理解してくれませんでした。「女の子として生まれたのに、ウルトラマンみたいな、男の子が気に入るものが、どうして好きなの」と。私もよくわかりませんが、ずっとそんなヒーローのことが好きなのです。中でも一番好きなのはウルトラマン・エスです。

十一歳になって、初めて君の言葉を勉強できることがわかりました。私たちが住んでいたビルの一階のおばさんの娘が北京外国語大学に合格したのです。とても羨ましく思いました。でも、そのときには、君のことを熱心に勉強していこうとは思っていませんでした。君のことをよく知らなかったからです。

大学の日本語学科に入り、学年が進むに従って、どんどん君のことがわかるようになりました。面積は中国より大きくはないけれど、経済も政治も発達しています。昔、中国と戦争がありました。でも、それはもう終わったことです。重要なのは、これからのことではないのか、お互いに助け合って一緒に進歩することではないのかと思います。君は私の国の近くにいますし、アジアでも全世界でも影響力のある国同士として仲よく暮らさなければ、他の国の人たちは私たちのことをきっと笑うにきまっています。あっ、こんな話をしちゃった。ごめんね、元の話に戻りますから。

君のことを勉強しようと決心したのは大学入試のときでした。まったくためらわずに「日本語科」を選び、夢のような大学に入ることができました。両親も理解してくれていて感謝しています。

最初は、毎日「あ、い、う、え、お」ばかりでつまらないと思いました。でも、勉強し続けた結果いろいろなことが発見できました。日本語の新聞や本などを読むこと、日本のドラマを見ること、日本人と話すこと、これらは全部すばらしいことだということが。日本語を聞けば聞くほど、話せば話すほど、きれいに感じます。好きなウルトラマンをこの手ですくい上げることもできました。吹き替えのものもやめて、日本語で見えています。ウルトラマン兄弟たちの勇気や精神を深く感じる事ができます。ネットで、ウルトラマンのファンと一緒に討論し、映画に字幕を作ることもしています。君、うれしいですか？君は私のことをよく知らないと思うけれども、私は君のことを考えながらこれからも頑張ります。

ずっとこっちのことばかりしゃべってきていますよね。ところで、君はどう、どんな具合ですか、傷は治りましたか。三月に大きな地震があったではありませんか、君は心も体がとても痛いにちがいありません。でも、大丈夫、私たちがいるから。支えていますよ。原子力発電所のことで困っているでしょ。迷っているでしょ。いいことも出て来ているけれど、やっぱり悪い影響もたくさん出て来ていますね。中国でも原子力発電所についていろいろな議論が出て来そうです。必要か必要でないか、

君も子供たちの言い争う声をきいて、どうしていいかわからなくて、頭が痛くなっていると思います。でも、君がどんな決定をしても、支えます。君のこと信じているからです。もう一つ、君の頭が痛くなるのは子供たちのリーダーのことではないのかな。首相は短い間につきつぎと変わっていて。これはどうしてでしょうか、よくわかりません。だから、君が戸惑うことも理解できます。

こういう話を聞きました。「日本はもう失敗した。大地震のせいで、発展が遅くなるぞ」って。だからといって悲しまないでね。こんなことを言う人は遠くを見る目がない人です。気にしないで、自分の道をしっかり着実に歩いてね。少なくとも、チャンスがあったら、私は君を見に行くからね。一番行きたい所は京都。そこで、古い雰囲気を感じ取り、君の心を読んで、君の本当の姿が見られるようになりたい。会いに行けるように頑張りますからね。

いろいろ話をしたけれど、全部本音で、思い出したり頭に浮かんだりしたことを言っただけです。それから、来年は2012年、中日両国は国交正常化40年を迎えます。もうそんなになるのかな。けっこう長い時間ですね。でも、ここで止まってはいけません。もっと長く付き合うために、頑張らしましょう。きっと美しい未来が作っていけると私は信じています。

(4) 優秀賞

長安大学 史永楽

「日本—私があなたに言いたいこと」

「頑張れ、日本!」、日本—私はあなたにそれを言いたい。

ビルが倒れて、にぎやかな町はあつという間に廃墟になってしまった。そして、大地震は津波を引き起こした、瓦礫と海水の混じり合った津波が、濁流のように家を、畑を、道路を呑みこんでいた。走っている車に波がのしかかった。かけがえのない命が呑まれていく。地震や津波による死者の数は日を追って増加し、犠牲者が何人になるのかも分らなかった。被災地の悲惨な状況を見るたびに、心が痛くてたまらなかった。その時、「頑張れ、日本!」と、私は叫んでいた。

地震が発生した後、日本人はすぐパニックから冷静さを取り戻していた。被災者は一所懸命恐ろしさを抑えた。何にも増して、この大災害を生き抜き、被災者としての自らを励ましつつ、また、国民一人ひとりが、被災した各地域の上にこれからも長く心を寄せ、被災者とともにそれぞれの地域の復興の道の見守り続けていく。私はこれからの日々を生きようとしている人々の雄々しさに深く胸を打たれた。

厳しい寒さの中で、多くの人々が、食糧、飲料水、燃料などの不足により、極めて苦しい避難生活を余儀なくされていた。政府は大きな力で被災者を救うことができる。これからも国を挙げての救援活動が進められ、被災者の救済のために全力を挙げることにより、被災者の状況が少しでも好転し、人々の復興への希望と愛につながっていくことを心から願わずにはいられない。この時、「頑張れ、日本!」、私はあなた（日本）にそれを言いたい。

地震のために、福島原子力発電所からは放射能が漏れ出した。被害を最小限に抑えるため、50人の労働者は自ら望んでその原子力発電所に入った。その隔離地域に入ったら出ることはできないかもしれない。日本の安全のために、世界の安全のために、彼らは必死に愛と覚悟を抱いて原子力発電所に入った。彼らのことを見て、私は中国の四川省で起こった大地震を思い出した。その時、山崩れと地割れなどで、被災地の地状況はめちゃくちゃになっていた。しかし、一日も早く被害者を救うため、何人か

の兵士は必死の覚悟で 3000 メートルの高い空からパラシュードで飛び降りた。人を救えさえすれば、自分の命を失ってもかまわない。これは本当に尊い愛の精神である。これがこそ人間として深く胸を打たれることである。私は中国だけでなく、日本の 50 人の労働者のその時に、「頑張れ、日本!」、私があなた（日本）に言いたい。

かって、鴨長明が『方丈記』のなかで「なごり、しばしは絶えず」とおびえた余震が、いま、東日本を不気味に揺さぶっている。長い災害の歴史が、今、また日本という国の地力を試している。「頑張れ、日本!」。私あなた（日本）にそれを言いたい。

「人とはなんて美しいものだろう、人が人であるときには」。古代ギリシャにこんな名文句があった。黙々と耐える被災地。一条の光さえ見えない方も多かろう。近くからも遠くからも、私たちは「頑張れ、日本!」という言葉で励ましたい。

大きな災難に出会ったときにつなぐための手が、私たちの心にはある。皆が一致団結すれば力は大きくなり、地震災害を克服できる。国が多事多難であれば、人民はかえって奮起して国の興隆をもたらす。

「頑張れ、日本!」。日本—私はあなたにその言葉を言いたい。

西北師範大学 高瑞金

「日本の大震災に思うこと」

「おばあちゃんが病気の、あたしどうすればいい？」夏休みのある日、姉から電話がきた。ようやく病院についた時、もう大丈夫だと先生がいった。しかし、祖母の入院と私の人懐っこい性格のため、たくさんの病人と会って親しく語り合った。豊富な経験をたくさん手に入れた。人の死に遇ったこともある。赤の他人なのに涙があふれた。生まれて初めてこの目で家族以外の人間の死を直面して、意外なことにあれだけの強い心の痛みを覚えた。

ひとりの人の死さえあれほど辛かったのに、民族とか国家とかの災害に遭遇したら、どうなさるんだろう？今年の3月11日13時45分、日本でマグニチュード9の大地震が発生した。一瞬で花も木も家も街も人の命も、なにもかもが消えてしまった。3年前の2008年、中国の四川でマグニチュード8の地震が発生した。ちょうどその時、私は高校三年生で故郷にいた。四川のすぐ近くの小さな町だが、影響がとて大きかった。あのときあの場面のあの恐怖感は一生涯忘れられない。だから、日本の災難は、とても身にしみた。

災難を前にして、日本人の冷静、沈着の態度がわたしを感動させた。ねばり強い我慢する精神が私に深い印象を与えた。

昔から日本は火山や地震の多い国だ。その二つの自然災害とともに生きているといわれている。地震が日本人の生活の一部だと思われる。地震はいつ発生するかも知らないが、日本列島の人々は数千年も生活している。大地は動かないといわれるが、日本はいつも揺れ動いている。そういう体験がある日本人は別の地理環境に暮らしている人間と比べると、自然観が違っている。

大自然に出現する猛烈な災害は、日本人に無常観を身をもって感じさせる。これによって、自然に従い、精一杯風土に馴染むという習性になっている。「祇園精舎の鐘の声、

諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色。盛者必衰のことわりをあらはす。おごれる人も久しからず、ただ春の夜の夢の如し。」有名の「平家物語」の中で「諸行無常、盛者必衰」という思想があることからみれば、日本人の無常観念は昔からあることだ。したがった、日本人が今度の震災に対しての態度もわかりやすいと思う。

日本人の美意識には「物の哀れ」がある。「物の哀れ」というのは、人生の機微やはかなさなどに触れたのに感ずるじみじみとした情趣からだ。

日本の大震災について、日本人の精神世界を思い描いた。大和という民族は全体からいえば、とても素晴らしい。私たちにとって勉強する価値があるかもしれない。日本人がこの難関を乗り越えたら、遠くに光があふれていると私は信じている。

上海師範大学 史菲菲

「日本の大地震に思うこと」

近年、地震という自然災害が頻繁に起きるようになってきました。日本は無論、中国でもここ数年、よく地震で被害されています。08年の四川大地震はその例の一つです。

地震とは、一般的に、火山活動に引き出されるものです。地球には、火山地震帯という地域が六つある、その中の一つは日本だから、日本は地震を持っている国だと呼ばれています。そのうえ、多くの震源は断層に分布していて、マグマが激しく活動すると、地震が起きやすいです。地震の結果としては、家屋を倒されて、地面を裂けられるなどの恐れがあります。さらに、海底で地震が起きれば、津波を引き出しかねないです。怖くてたまらないと思います。

3月11日、東日本太平洋側で起こった大地震は全世界の人々を驚かせました。地震のせいで、ビルが倒れたり、人が生き埋められたりして、にぎやかな町はあっという間に廃墟になってしまいました。そして、大地震は津波を引き起こして、被災状況をもっと厳しくさせました。あるいくつかの地域は地震と津波の影響で、警察も近づけられなく、厳しい品不足の状況に迫りました。

地震発生した後、日本人はすぐパニックから取り戻しました。被災地の被害者は騒ぎなく辛抱強く自衛隊を待って、ほかの県の人々は落ち着いて平日のように暮らしています。逆に、中国の国民は福島原発事故ですごいパニックに陥りました。みんなは風評に振り回されて、慌てて塩を大量に先を争って買います。スーパーでの塩は何時間の内にたちまち売り切れました。日本国民は一生懸命恐ろしげを抑えたからこそ、政府はストレスをかけられないで、全力に被害者を救うことはできます。そんなことを見て、日本は遅かれ早かれきっとピンチを切り抜けることは分かりました。

そして、日本人の原発事故に表れた高い素質は私をもっと感服させました。地震のために、福島の原子力発電所は放射能が漏れてきた。被害を最小限に抑えるため、50人の労働者は自ら望んでその原子力発電所を手入れをしました。その隔離地域に入ったら出ることはできないかもしれないです。全日本の安全のために、全世界の安全のために、彼らは必死の覚悟を抱いて原子力発電所に残りました。彼らのことを見て、私は中国四川省で起こった大地震を思い出しました。その時、地震によった山崩れと地割れなどで、被災地の地面状況はめっちゃくちゃになりました。しかし、一日も早めに被害者を救うため、何人かの兵士は必死の覚悟を抱いて3000メートルの高い空からパラシュートで飛び降りました。人を救ってさえすれば、自分の命を失ってもかまわないです。これはどんな偉い覚悟です。日本人も中国人も素晴らしい国民性を持っている民族です。

テレビでこの大地震の情景を見た、生きる気力を失った瞳、やせ細った身体…そんな死の極限で懸命に生きる子ども達の姿をテレビで見かけ、大きなショックを受けた幼かった頃の自分を今でもはっきり思い出すことがあります。何もかも与えられている自分、食べ物も欲しいものも何でも手に入るそれが当たり前で育って私には、そうでない多くの子ども達が自分の才能を発揮することなく命を失っているという現実が、ショックでなりません。同じ人間としてこの世に生を受けていながら、生まれた国や外見にとって全人類平等であるべき人権が不平等であるという矛盾、そんな不平等があるからこそ与えられていた自分の生活を、当たり前として生きてきた自分。現在の私たちの生活が、かつて他国を植民地支配し人権を無視して富を追求したけっかであると気がついたとき、世界の飢餓や貧困から無限の可能性を秘めたこの子ども達を救うことはボランティアではなく、私たちの義務なのだと思います。

今回の地震は私をいろいろ考えさせました。日本と中国は一衣帯水の隣国で、長い交流歴史もあり、精神的に両方はよく似ている所はよくあります。大局意識や気配りなど、たくさんよく似ている素晴らしい伝統があります。しかし、中国人は日本人から習うべきこともいっぱいあります。私はこれから両国の開発経済を学びではなくて、持続可能な未来に繋がる国際支援に参加したいと考えています。文化も言葉も国籍も超えた地球人として、私は新しい一歩を踏み出したいと考えています。

湘潭大学 徐瑛

「日系企業に言いたいこと」

20年前、中国では、日本の製品、特に電気製品はとても人気があった。でも、近年、日系は中国市場でだんだん不景気になっているようだ。松下、三洋、東芝などの会社はもう最悪になって回復する兆候もない。

私たちの周りには日本製品、化粧品、電気製品、携帯電話、車などがたくさんある。

日本の製品はデザインもよく、それに環境に優しく省エネである。つまり、品質がとてもよく消費者の心をひきつける。

日本の製品は長所がたくさんあるが、それぞれの短所もある。日系企業はよく金持ちだけを消費の対象とすることもあり、日本の製品は値段はとても高くて一般庶民には買えない。

それによって、日本の製品の売れ行きの不振はいろいろな方面に現れる。まず、市場占有率はだんだん低くなっている。日本の企業は先進的な製品や技術を中国に輸出するかしないかなかなか決められない。だが、欧米や韓国はこのチャンスを把握して積極的に中国に技術製品を輸出する。欧米製品や韓国製品はますます主流となってきた。

それに、日本製品のブランド影響力は年々下降している。松下電器、三洋電器より、多くの国民は小天鵝、海尔などが好きだ。そして、国産のやすいものを買って恥ずかしいと思っていない、十分に気に入っているからである。

この現象の要因というと、きりがないほど多い。

第一、テレビの生産に採用する技術を素早くデジタル技術に転換しなかった。技術開発するよりほかの国の技術を真似るほうがコストが低い。そのため、日本は新しい技術を開発しないでだんだん落後した。

第二、中国市場は高速に変化しているのに、日本は傍観する。中国市場の競争がとても激しいことも

あり、商品の値段などは急速に変化している。日系企業はこの変化について調整しないので、結局市場から淘汰されるのである。

第三、日本企業は中国市場の大切さを軽視した。中国は世界で一番人口が多い国で、購買力はとても高い。残念ながら、日本人は傲慢でこの大きい市場を重視しなかった。中国で日本産品の市場の拡大に努力しないから、不景気になるのは当たり前だ。

第四、日本企業の管理制度は固定化している。市場に対しての反応は鈍いことはもさることながら、政策や戦略を決めるのが困難でいろいろな不足がある。

中国で成功するために日系企業に必要なことはたくさんある。考え方を変えなければならないのが第一だ。多くの日系企業は中国では日本製品は当然高級な商品だと思っていることもあって、製品の値段をとても高く設定しており月給二千元以上の人しか相手としていない。しかし、十三億の中国人の中で、この階層の人はわずか四千人ぐらいだ。だから、値段を下げてできるだけ多くの中国人の購買力を利用しなければならない。それから、企業の管理制度を変更必要がある。日系企業では昇進は年功序列によって行っているのだから、高級管理者のほとんどは六十歳を過ぎている。さらには七十歳過ぎても驚くほどのことではない。彼らはいつも技術製品を中国に輸出することをためらう。企業として中国でお金をもうけたいというのは当たり前のこととして分かるが、その反面、先進的な商品や技術を中国に輸出すれば、何時か中国に乗り越えられるかもしれないと心配する。何でも心配していて、チャンスに挑戦する勇気がない。そこで、管理者を若者化するほうがいい。昇進は年功序列によって行うのも不合理で変更しなければならない。能力さえあれば、昇進させるべきだ。

ほかに、中国人の考え方、生活習慣を検討しなければならない。例えば、食事のとき、お客が食べ物を食べ終わったら、日本人はうれしくなる。おいしいだろうと思う。それに引き替え、中国人の考え方は違う。食べ物が足りないのかと思う。中国人はあまり「すみません」という習慣がない、だから、中国人のお客様とのアフターサービスなどの交渉をそんなに気にしないほうがいい。中国人はすごく体面を気にする。ほとんど同じものでも、高いブランド商品にするかもしれない。だから、ブランド影響力を拡大することが重要だ。

つまり、日系企業は商品の値段を下げて、中国人の考え方、習慣を取り入れて企業の管理や運営を調整しなければならないと私は考える。

常熟理工学院 高科

「感知日本」

日本の居酒屋は長い歴史を持っている。大昔から酒場があった。日本の会社では、新人が入社した時や、社員の部署が変わる時、職場で人事が変わる時に飲み会が行われる。また、新年会や忘年会、大切なことを皆で一緒に頑張った時、一斉に居酒屋に行く。居酒屋はまた一種の日本文化である。働く時、一生懸命で原則を厳しく守る日本人のことは多分世界中の人、誰でも知ってると思うが、居酒屋にいる日本人は全然違う雰囲気であり、とてもにぎやかになる。平日職場で会って、仕事のことだけについて話すことが多いので、居酒屋に行けば皆遠慮せず、楽しい気持ちで話をする事が出来る。日本の赤ちょうちんの居酒屋は、今まであまり評価されることもなかったが、しかしイギリスのパブやフランスのカフェ、アメリカのバー、スペインのバルなどに十分匹敵する。ひとつの完成した飲酒文化であり、多くの人々の人生に、生き甲斐を与えてきたという立派な功績もある。

日本の居酒屋は長い歴史を持つ。酒は、おいしいばかりでなく、人を酔わせ、いい気持ちにさせることから、人々はそれを神に捧げ、恐ろしい神を味方に引き入れるか、なだめて大人しい神に変えようとした。それがお神酒だった。昔は上司や、同僚、おとくいなどより、まず神様に根回ししてお頼みしておくことが肝心だった現在は老若男女を問わず利用されている、かつては居酒屋は主に男性会社員の大衆的な社交場として機能していた。それは1970年代までの居酒屋といえば男性会社員が酒を飲んでいるところというイメージだった。近年は女性にも好まれるようにチューハイやワインなど飲み物や料理を豊富にしたり、店内装飾を工夫したお店が多くなり、女性だけのグループや家族連れを含め、誰でも気楽に利用できる場所というイメージが定着しつつある。特に1980年代ごろから居酒屋のチェーン店化が進んだ。このことで、居酒屋は安く、大人数が集まることができ、少々騒いでもよく、様々な人の好みに合わせて飲み物や料理を選べるというメリットを持つようになった。このため、学生、会社員、友人などのグループで簡単な宴会を催す際の会場としてよく用いられている。なお、チェーン店を中心に基本的には低価格で気楽に飲食できることを売りにしている店が多く、そのため男女に関わらず広い層を顧客としている。

料理としては最近では刺身だけではなく、焼き物、煮物、てんぷら、フライ、エシャレット、トマトと何でも揃っている。広い層を顧客としているから、しゃべるお話も前より内容幅広くなっている。

「親しい仲間と一杯やる時、疲れを発散したい時、彼女と日本酒を飲みたい時……そんなときこそ、“良い酒”“良い肴”“よい雰囲気”の三拍子そろった居酒屋が嬉しい。」これは日本人の普通のサラリーマンがなぜ居酒屋がよく行く理由としての答えである。刺身や大きな料理はないが、軽く酒を楽しむには十分だ。ありがたいのは夜十二時までやっていることだ。夜型のおじさんたちは夜遅くまで働いているけれど、それでも、十時過ぎあたりにうまい具合に仕事の切りのよくなる時がある。後は明日やる方が能率的だな。仕事場で打ち合わせを終えた夜遅く、同僚をビールでも飲みないと誘い、ある居酒屋の常連として、同僚を連れて行く、後はどこかで座ることだけで、黙って注文しなくても、この居酒屋に毎日のように顔を出すと常連ということになるから、どんな酒、どんな肴は決まっているように順番に出してくれる。時には主人に「ちゃん」づけで声をかけたり、「いつもの」といってみたり、声も態度も大きくて、その親しさだけで、よい雰囲気になるから、気楽なデードのところだ。そんな雰囲気、後は同僚との気楽な話だ、子供の話、奥さんの話、会社の上司の話……なんでも気楽に出来る。

居酒屋はまたおじさんたちの一人の孤独なデードのよい場所だ。孤独を楽しむことが出来ることは居酒屋の効用のひとつ、ぼんやりしていただけることだ。男一人、ぼんやりできるところもないのか。そういう時は居酒屋だ。しかも酒まである。酒を置き、時折ちびりとやっていたらぼんやりしようとも怪しまれない。貧乏症で何かしていないと落ち着かない人も、「ぼんやりする」を試してみたらどうだろうか。居酒屋で隅の方に座り、ぼんやり酒を飲む。今の速い社会で人間、一日一回ぼんやりしなくてはならない。

一日の仕事を終えたときはどこか頭の中に興奮がまだ残っている。それをそのまま家庭へ持ち帰られては奥さんも大変だろう。まだ顔は怖いし「あれはどうなっているんだ」と言葉も会社言葉だから。居酒屋は本来、往来を歩いている、店構えなりに心ひかれ、日本の一種の文化を語っているものである。

「日本—私があなたに言いたいこと」

「日本はどうでしたか？」とよく中国の友達に聞かれた。その度に、たくさんの人々の顔と、さまざまな情景が浮かんで来て、なんともいいようのない感じがした。伝えたいことが山ほどあったが、どこから言ったらいいのか分からなかった。実は日本人にそのことを質問してほしい。それだと、日本について言いたいことをちゃんと伝えられるのだ。

私は2010年4月2日に東京に着いた。通りを車がひっきりなしに行き来しているのを見た。全然知らない国で全然知らない人と、何が始まるのか、私の前にはいったいどんな運命が待っているのか、頭が真っ白になった。そのとき、初めて国境を出て、日本の土地を踏んだ私は、ある決心をしていた。これから私は一人になり、自分で自分の面倒を見なくては行けない。全然知らない国で全然知らない人と、何があってもわからないから、人を信じ、頼りにすることができない。物事を感情的に受け止めてはいけない。人間関係というものを冷静、冷酷にまで見なければならぬ、と……。

最初はそういう方針で戦った。本当に人に迷惑をかけずにやってきたが、さびしくも感じた。人と人の絆は悪いものばかりでないことはわかっていた。でも絆を失った闇から一步を踏み出すのが想像以上にむずかしかった。そして一ヶ月ほどして、日本のある人と知り合った。運命の扉が開きはじめたのだ。

ある日、その人から夕食に招かれた。私は初めて日本の家庭の中で食事をした。その時家族の人たちは、食事をする前に、「頂きます」と言った。子供たちも目をつぶって小さな手を合わせて、「頂きます」と言った。私は心の中で、えーと、「頂く」は「もらう」の謙譲語だから……と、学校で勉強した日本語の文法を思い出しながら、言った。「頂きますって、ご飯をもらうぞという意味ですね」家族の人たちは「あれっ？」と言う顔で私のほうを見た。するとご主人が、ゆっくりと説明してくれた。

「今日の料理は、親子丼です。卵が入っています。卵は、本当は鶏になるはずでした。でも、ひよこになる前に食べられてしまいます。もっと長く生きられたのに、これまでです。私たちは、自分の命を生かすために、ほかの命を頂いているのです。決してもらうのではありません。そう説明してくれた。私は初めて「頂く」という言葉の本当の意味を知った。感動した。私は中国で鶏や豚を見ると、思わず「おいしそう」と涎をたらした自分を恥ずかしいと思った。

中国では、食事の前に言う言葉はあんまりない。一番年長の人が、「皆さん食べなさい」といって、彼が先に食べ始めるのを見てから、ほかの人も食べ始める。そして、食事が済んだら、「お腹がいっぱいになった」という言葉を言うだけだ。

日本では、食事が終わると「ご馳走様」と言う。これは、「おもてなし」に対する感謝の気持ちだそう。料理を作ってくれたのが家族であっても、感謝の気持ちを表すのだ。「頂きます」、「ご馳走様」の言葉を毎日重ねていくうちに、食べ物の本当の美味しさが体に染み渡っていくのだと、日本に来て初めて知った。優しい日本語が私の心を揺さぶった。この時私は絆を失った闇を踏み出そうと決心した。

私は一人暮らしなので、言うことも言われることもないが、「お帰りのさい」と「ただいま」という言葉がある。私は、テレビドラマの中の人たちがそういう言葉を使っているのを見て、実際に自分が言われたら、どんな気持ちになるのだろうかと思っていた。中国では、誰が出かけても、誰が帰ってきても、ほぼ黙っている。冷たいとはいえないが、やさしくないのだ。

私はその年の夏休みに三泊の旅行に行って帰ってきた。いつも親切にして下さるある日本人のおばさんが玄関で、「お帰りのさい」と言った。家族でないのにそう言ってくれた。その時、なんとも言いよ

うのない暖かさを感じた。一人暮らしの寂しさが、ふっ飛んでいった。私はすごくうれしい気持ちで、生まれて初めて「ただいま」と言った。ここは我が家ではないことを知りながら、我が家のような存在感を感じた。日本人のやさしさを、日本語のやさしさと美しさで知った。そして、そのやさしさが私の人生観を変えてくれた。

そのあと、私は勉強したり、アルバイトをしたり、友達と遊んだり、おばさんの手伝いをしたりして、充実した毎日を楽しんだ。

数ヶ月後、私は帰国の飛行機の中にいた。飛行機が飛び立つ時、思わず涙が出てしまった。窓から外のきれいな夜景をじっと見ていた。見えなくなるまで、ずっと見ていた。私にとって日本の最後の姿を深く心に刻みだかかったのだ。そして、いろいろなことを思い出して、どんな言葉を使っても表せない気持ちになった。「日本、いろいろ教えてくれて、ありがとう。本当にお世話になりました。」と大きな声で日本列島全部に伝えたかった。そうすれば、日本人は必ず「いいえ、こちらこそ。一年間ご苦労さまでした。中国の方によりよくお伝えください」と答えてくれるだろう。

そう思うと、感動と感謝でいっぱいになった。そんな気持ちを大事なお土産にして家族と友だちに上げようと心に誓った。

謹んで、その気持ちと感謝の意を日本に伝えたい。

天津外国語大学 孫迎

「日本の大地震に思うこと」

東北地方太平洋沖地震が起こるからもう半年あまりが経って、被災地の皆さんはお元気ですか、もう故郷を再建して新しい生活を始めたか、そして、また笑顔になったかと私は時々気遣っている。

今年3月11日、日本は強い大地震に見舞われた。それに伴って起こった津波と原発事故がさらに被災地の被災状況を重なった。ニュースで大変なシーンを見て、とても心配だった。

中日両国の間では、長年の歴史問題が続き、日本は中国を侵略した残酷な事実は中国人にとって、決して忘れられないものだ。経済関係は密接けれども、国民の交流は冷たい。そして、お互いに偏見と誤解を持っている人もたくさんある。日本文化と風景に興味を持って、日本語を勉強している学生として、あの間、私はインターネットでずっと日本の状況を注目していた。そして、中国側はどんな姿勢をしているか。

国民側：

「被災地のご無事を心から祈っている」

「日本、頑張れ」

インターネットの掲示板にこんな言葉が相次いでいた。少数の悪意の言論もあるけど、多数の応援の文字と励みは躍って、優しく暖かくて心を照れた。これらを見て、とても感動だった。2008年四川大地震をはじめ、多くのひどい自然災害に見舞われた中国人はその痛みと苦しみは今までも忘れ難い。私はあの時、生命の大切さが分かった。これから日々の生活を大切にして、生活の美しさを楽しんでいることを決めた。命は何より大切だ。違い国籍の人、命の価値は同じだ。今回、中国人は意識転換して、心から日本の被災者を応援した。

政府側：

中国政府は日本政府と日本国民に心からのお見舞いの意を表し、必要な援助を提供する意向を表明し

た。中国赤十字会から救援物資はすでに日本へ発送され、救援隊と医療チームも派遣した。そして、経済上の援助を提供した。被災地救助と再建することを引き続き応援した。温家宝総理は自ら被災地に向いて、住民を親切に慰問した。「自信、勇気、力量」という贈る言葉で被災者を励んだ。

「天災は非情だが、人には情がある。」私はこの言葉が好きだ。自然災害は非情で、勝手に私達の命を奪って、家を壊す。大自然の前に、人間はなんと弱いものだ。しかし、人間には感情がある。巨大な自然災害を前に民族に関係なく国籍に関係なく、苦難を分かち合い、助けあう。力を合わせれば、どんな危機があっても、きっと乗り越えられると思っている。08年中国で大地震が起こった際、日本政府と日本国民からの応援を忘れることはない。今回、われわれはかえて日本を応援した。人の命の尊さの前に、偏見を置き去り、人道主義の光が輝いている。

それに、世界の範囲で経済一体化に伴って、国と国がますます深い経済関係になり、お互いに影響している。独善で自分のことばかり考えて、他人を顧みないことが絶対無理だ。だから、中国は一衣帯水の隣国として、他国任せにせず積極的に支援を行うと思っている。

今回の大災難は日本の災難だけでなく、人間共同の悲劇だと思う。同じ地球に住んでいるので、自然災害の前には、人類は運命共同体だ。この世界は時々起こる地震、津波、土石流などが人類の共同直面する脅威だ。それで、環境を守ることは世界全体の最優先の課題として広く検討されている問題だと思う。環境問題だけでなく、原発安全問題の引き起こした新しいエネルギー問題も各国に深く考えられ、協議されるべきだ。それには地球に住む人全員の協力が必要である。

総じて、一衣帯水の隣国としてどんな歴史があっても、どんな違いがあっても、現在では両方の利益のため、相互に助け合わなければならない。冷たいの現状はお互いコミュニケーションが足りないことにあると思う。日本語専攻の学生として、その中日交流の架け橋になりたいと思う。もし今回の災難をきっかけに、中日両国の人々は理解と友情を深められ、新たな局面を迎えれば、有り難いと思う。

蘇州大学 王莹

「愛の心」

日の光は、依然として、身を照らしていた。道端の花壇の花が満開の真っ最中だった。季節の移り変わりには、物事は何もかも変わらずに自然にいくようだが、でもその本質に潜んでいる無常は、一日も遠く離れたことはなかった。それに気がつかなかったかもしれない。一瞬にして、恐ろしい夢のような渦に巻き込まれた今回の東日本大震災は、その無常の一つであるし、マグニチュード9.0の大地震も、怖い災難を引き起こした無常の一つである。

その映像を目にしたときに、この世のものとは思われないほど悲惨を感じた。中国の汶川玉樹大地震のことを考えてみよう。こんな人間の力をはるかに超えた災難に、日本を含めて世界各国の支援が届いた。これからは自然界のもっともすばらしい生命はそんな無常から遠ざけて行くことを願う。そして愛に国境はなく、災難に遭われた人々の立ち直りを祈ると同時に、自分たちが何かできることを考える。

非常に痛ましい東日本大地震は、二度の汶川、玉樹大地震を経験した私たちにまた精神的に強いショックをさせてしまった。人の不幸を喜ぶことはなく、まったく無関心でもなく、日本を援助し、日本の安全を祈ったのは、心の底から唯一の願いだった。これは抽象的なヒューマニズムではなく、ひどい災難に面して人間の強い共鳴だった。

「弟子規」には「凡是人、皆須愛、天同覆、地同載」と書いてある。「天地の間に生まれ育った生命体

としての人間は、仁愛の心を持って、互いに關心しなければならぬ。しかも、このような愛は狭いのではなく、広い。」という意味である。この文章から、心を広げて、他人を気遣うこそ、幸福感や満足感を持つということは、われわれの祖先が後輩の私たちに教えていると思った。自分だけさえ良ければと思っている心は、真の幸福から離れていくものだとなつたと思う。

距離的に遠いから、日本人の痛みに触れることはできなかったが、祈りと同情という気持ちを表すことはできる。そのうえ、私たちの愛の心を培うとともに、心がますますひろくなる。それに反して、人の不幸を無関心でいれば、心がますます狭くなる。心が広く逞しいことは、われわれのあるべき姿だ。相手は困難にあったとき、同情心を持って、力を尽くして助けるのが当然だ。そうすると、自分ももっとも強くなれる。

皆愛の心を抱くこそ、真の幸福に近くなれる。もちろん、最初とに、私たちは本当に愛の心は遥かにふられない目標になったが、結局、私たちの心は永遠に雑然とした世界におかれていた。

愛の心をもっと開こう。他人を愛する精神を発揮すれば、「狭い愛」に囚われない。他人を愛することは、本当の愛だと私が思っている。

大地が泣いた、
海が泣いた、
夕日が泣いた、
人が泣いた。
泣け、泣け、泣け、
飽きするほど泣いてみる、
笑いに変わるまで。
花が咲き、
そして散る。
星が輝き、
そして消える。
戦い、傷つき、悲しみ、
刹那の邂逅から、
愛しに変わるまで。

この詩がいま私の気持ちを描いているように思う。

三江学院 陸徐霞

「日本の大地震に思うこと」

日本に大地震が起こったというニュースを聞いた時、私はびっくりした。新聞やインターネットを通して日本の情報に注目した。ビデオを見て惨めな思いをしていた。町はあっという間に大きな波にさらわれた。大きな汽船はおもちゃのように波に消えてしまった。印象深いのは、一人の年寄りが廃墟に座ってもう助からないという目つきをしていたことだ。日本の災難の写真ではないかもしれないが、彼らは家族を失うことと不幸な経験に遭うことが同じだ。先生の話では、何百人もの小学生が津波で亡くなったそうだ。彼らの両親はなんと深刻な打撃を受けたことだろう。悲惨な画面を見ていろいろなことを考えた。

日本と言えば、中国人は思わず思い出すのは歴史問題で、日本が中国を侵略した事実だ。しかし、日本は犯した罪を認めなくて、教科書の上で侵略の事実を否定した。今、彼らはこの罪をうけるべきだと思った人もいる。私は自然に向き合う時、私たちは同じ人間だと思う。国境を問わずに気持ちが一つになって助け合う。知らず知らずのうちに人間の「和」を保つことができる。また、中日の民間交流が活発になるにつれ、両国国民の相互理解が深まり、心と心の結びつきもますます強くなっていく。

「愛に国境はなく、苦難は共に分かち合う」2008年の四川地震にしても、2011年の日本の大地震にしても残酷な自然は人間の肉体も精神も傷つけた。自然災害に遭った時、歴史問題や以前の摩擦は据え置きにしてお互いに助け合った。四川地震の時、日本の救援隊は真っ先に四川に着いた。救援隊のヒーローは全力を尽くして被害者を救助した。その上に、彼らは遺体に向かってお辞儀をした。中国人としての私は深く感動した。13億の中国人も必ず私と同じように感動したに違いない。日本が地震に遭った時、中国も救援した。中国のメディアは直ちに被災地に対する高い関心を示し、中央、地方テレビ局や新聞各紙は地震関連ニュースを報じた。

『信は縦糸、愛は横糸、織り成せ人の世を美しく』は岡崎嘉平太氏が信条としていた言葉だ。岡崎嘉平太先生は中日友好という遠大な理想に全力を尽くした。彼はいつも中国のことを気にかけた。特に、中日国交の断絶の時に彼は中日の貿易を通じて中日の関係を促進した。学生としての私にしてみれば、岡崎嘉平太先生のたゆまず頑張り抜く精神は私たちにはなかなかできない。これは実に敬服に値する。

私はずっと日本人の強い秩序正しさに敬服している。大地震が起こってから、被災地では食べ物が全部なくなった。しかし、日本人は秩序を保って長い行列に並んで食べ物を受け取った。この画面に世界中の人々はびっくりした。この長所は世界の国々の人々が学ぶに値する。

中学校の時、私の歴史の先生は、中日の歴史問題を教えると同時に日本人の優れた点も教えてくれた。日本の会社員は会社を自分の家のように考えて全力を尽くすと話してくれた。その時、私はさっぱり理解できなかった。しかし、これは日本人の長所だと思う。彼らの強い責任感があればこそ、日本は今の経済大国になったのだと思う。

日本は必ず大地震の困難を越えられると確信している。

東北财经大学 李麗雅

「日本-私があなに言いたいこと」

日本に言いたいことを言ったら、まず日本語について話さなければならない。今日本語を勉強しなければ、日本への理解、日本文化への興味はとても話にならず、言いたいことないからだ。

授業中、よく先生に「日本語を勉強し始めたきっかけは何ですか」と聞かれた。二年生の時、「関原大連市大学生奨学金」を申請する時、「日本語の学習を始めた動機」という質問も出されていた。その時、私は「①日本文化に興味がある。例えば、生け花、書道、アニメなどを知りたい。②中学校から、ずっと英語を勉強してきましたが、大学入学を皮切りに、もっと充実感をもたらす科目を学びたい」と答えた。

実は、私はちょっと嘘をついた。そういう二つの理由で、日本語の勉強が始まるのではない。私の志望専門はもともと日本語ではなく、大学に入った時、日本語についての知識はちっともなかった。こういう状況下、日本語の勉強はいったいどうすれば、うまくいけるかと最初は散々悩んでいた。しかし、先生の指導の下で、勉強しているうちに、日本語が好きになって、日本語の勉強も軌道に乗った。「あ

いうえお」でも全然読めなかった初心者から、赤ちゃんのように日本語を一語一語覚えてきて、やっと今、友達と日本語で木村拓哉の最新ドラマについて、談笑できるような私になった。

今日本語には感謝こそすれ、いやなどはない。と言うのは、まもなく三年になろうとする大学生活は、一言で言うなら、日本語を勉強すればこそ、毎日有意義で、充実に過ごしている。そして、日本語の勉強によって、私が知ったのは、単なる一つの言語ではなく、一つの国、一つの民族なのだ。戦後から今日にかけ日本人が成し遂げた発展に、私はすごく感心した。勤勉な日本人、独特な伝統文化、日本は私にとって、初めての単なるイメージではなく、個体的な私と非常に関係のある国となった。

これが日本に言いたいことのひとつだ：風景のような国で、風景のような言語を育て、ありがとう。日本と言えば、中国人の頭に自然と過去の戦争が思い出される。私には戦争の体験はないのですが、戦争の苦痛は想像できない。ですから、以前の私は、なんとなく警戒心を持って日本人を見ていた。しかし、日本語の勉強を通じて、私はあの戦争で日本の国民も大きな被害を受けたことを知った。そして今日の日本人の平和友好へに願いも強く私の印象に残した。ある日本人の先生が、「あなたの日本語を、ぜひ日中友好に生かしてください」と言った。日本語を通じて、私は日本に縁を結んでいる。これからも、日本語を勉強し続けて、チャンスがあったら、日本に行き、自分の目でこの国を見て、社会の文化を体験してみたい。

日本語を勉強する二年前後、私自身の変化で、中日両国民の交流、理解の不充分さを痛感させられた。中日友好には両国民の感情の友好として、まず第一に互いの十分な交流と理解が前提とならなければいけない。こういう前提がなかったら、いくら友好、友好と口で言っても、ただの言葉に過ぎず、なんの効果もない。相互の心にまでいたる深い理解があってはじめて両国民の友好が築かれるのだ。しかもこういう理解が充分なら充分なほど、両国民の友好もより確かなものになるのだ。ですから、中日の交流をもっと盛んにし、互いの理解をもっと深くするということこそ、両国の未来を担う若者の責任となってくる。

従って、私が日本の言いたいことのもう一つは、これからの中日関係に関して、両国の若者のあるべき姿だ。

最近「対話」という番組を見てから、私はそれぞれの国同士に対する見方がずいぶん変わってきていることに気付かされた。それは、ある日本の有名なコンサルタントの話聞いた時のことだ。その方の話の中で私を一番驚かせたのは、彼の次に対する問題の答えだ。「もし、中国と日本の利益が衝突したとすれば、あなたはどうしますか？」と聞かれた時、彼は、「私は日本人ではなく、世界人です。日本に属するのではなくて、世界に属します。」と答えた。その言葉は人々に何を教え、考えさせただろう。このような国境を越え、人種を超えた見方は、グローバル化共存を基本にした考えだ。それは、これから両国の若者のあるべき姿と思っている。それは、より高いところから物事を考え、人類全体のことを私たち自身のことに置き換えた見方だ。中国も日本も、地震などの災害で困った時、世界から助けを受けることができるのは、このような考えがあったからこそだ。ですから、民族のこだわりを捨て、全人類の知恵と想像力を活用し、新しい角度から、人類のすばらしい未来を見つめなおし、しっかり頑張ろうではないか。それは私たち若者が中日関係に対して、果たすべき責任だと思う。

私は日本語によって、日本という国に縁を結び、これから、自分の日本語の知識を生かし、日本の若者と一緒に一衣帯水の両国の友好に、頑張るつもりだ。